

# 文部時報

第 1067 号

昭和41年 7 月

## ◆座談会◆

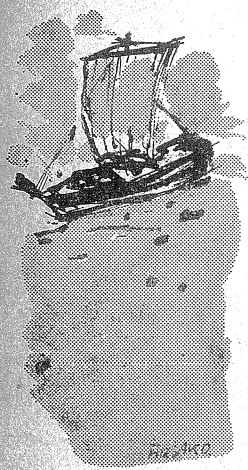
「後期中等教育のあり方について」

(出席者)・小川定胆・平塚益徳・黒板駿策

・鈴木重信・副島一之(司会)西田亀久夫

各種学校制度整備の方向	大崎 仁	26
勤労青年の教育	石川 智亮	33
高等学校教育における勤労青少年教育	古村 澄一	38
青少年の成長と能力の開発	沢田 慶輔	44
新しい通信教育の姿を求めて —NHK学園の教育実践の側面—	高塚 暁	49
著作権制度改正の方向 —2、3の問題について—	佐野文一郎	57
欧米における理科教育改善の動き	大橋 秀雄	70
各国におけるガイダンスと 大学入試制度	大臣官房調査課	77
教育用語「観察指導」とは	津村 令子	64
連載第六回 人物を中心とした社会教育史 「視聴覚教育」(その1)	鈴木 勉	85
文部省の会議・行事等から		66
文部省重要通達一覧		95

表紙 松村 優 カット 須貝夫早子



国語審議会初会合

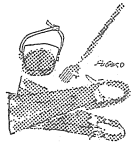
## 全国学力調査実施

昭和41年度の全国小・中学校学力調査は、さる6月24日いっせいに実施された。実施科目は小学校5年の国語・算数・音楽、中学校の1年・3年の国語・数学、3年の技術・家庭で、昨年同様20%の抽出、80%の希望参加だったが、一部を除き平隠に行なわれた。写真は渋谷区立大向小学校の学力調査を視察する文部省斎藤初等中等教育局長。

第8期国語審議会委員による初総会は、6月13日東京・平河町の全共連ビルで開かれ、会長に前田義徳氏(NHK会長)を互選した中村文相はこの審議会に「国語施策の改善、具体策について」諮問し、①当用漢字、②りがなのつけ方、③現代かなづかいなどについて検討を依頼した。写真は総会であいさつを述べる中村文相。



# 人物を中心とした 社会教育史



鈴木 勉

## 視聴覚教育(その一)

### 一、庶民教育の時代

明治初年からおよそ百年の間にわたる社会教育における視聴覚教育の歩みを概観し、そして、とくに、その発展に何らかの歴史的な役割をもった人びとをできるかぎり織りこみながら述べるのが本稿のねらいである。

はじめに、この庶民教育と題した理由を述べておきたい。

たしかに、明治以前の庶民教育は、今日われわれの周囲にみられるいわゆる社会教育の概念とは異なるし、区別されなければならない。しかし、学校という特別の教育機関をもたないで行なわれた教育的活動を実践し、指導した人びとは教育史の古代、中世、近世の中に見い出される。聖徳太子、弘法大師、貝原益軒、石田梅巖、二宮尊徳、福沢諭吉などの業績は偉大な社会教育家といえることができる。このように社会教育史をみると、古代から、とくに消長はありながら、連綿としてその歩みをつづけ、戦後、民主主義思想のぼっ興によって社会教育の発達が大いに助長され今日の進展ぶりをみるにいたったという見方が、一般的な社会教育論であろう。

そこで、このような考え方にたつて、社会教育史の中での視聴

覺教育の分野についても、その歴史の歩みを概観することが必要と考えた。

したがって、明治初年からの社会教育における視聽覺教育の歩みを述べるにあたっては、遠く古代にまでさかのぼって庶民教育における教育法の中に視聽覺的方法を求めた。

＊

＊

＊

奈良時代（八世紀）、遣唐使による唐文化の盛んな摂取によって、仏教文化の渡来とともにたらされ、わが国で制作された絵巻物形式の最古の遺品である「絵因果経」がある。

もっとも、わが国でも絵巻物形式のものは、このころより以前にも作られていたといわれているが、しかし、日本的な内容と様式をそなえた純粋な絵巻が生まれるようになったのは平安中期（十世紀から十一世紀）のころである。これら絵巻物の内容は、宗教的なものと、説話、物語、伝記などであって、詞書とこれを絵解きした絵画とが交互に配列して説話をすすめる形が多かった。

内容の多くは、仏典類、仏寺や神社の由来、神仏の靈験を描いた縁起物、高僧の伝記などであって、仏教的あるいは神道的なモラルが必ず説かれていた。しかし、この絵巻物の発達も、鎌倉時代（十二世紀）の全盛期を経て、十六世紀をもって終わっているが、この間、視聽に訴える絵画と文字を組み合わせた表現方法は、そのころの文字のよめない多くの庶民に宗教的な道徳や教養などの理解を容易にし、民衆を教化するための広い意味の社会教育の役割を果たしたものでいえる。この絵巻物の前後七世紀にわたる

間、特に記しておきたいことは、平安中期（十一世紀初期）、天台・真言の仏教が土着信仰と融合しながら、新しい宗教を形成しはじめた時期で、その新興宗教の一つに修験道がある。これは山岳信仰と、真言宗、原始神道との混合した宗教で、その成立の場所は熊野といわれているものである。この信仰を布教するための方法として御師、先達という外郭団体の組織化がつけられていたが、一方、全国を行脚する布教者がある。熊野巫女はその一つであって、彼女らは、布教の片手間に、各地の世間話を伝え、民衆の間により強い定着力をもたらしたらしい。（柳田国男「女性と民間伝承」）、さらに「嬉遊笑覧」には「熊野の絵と名づけて、地獄極楽、すべて六道のありさまを絵に書きて絵ときといひし」と述べられている。この絵ときとは持参の絵巻物をひろげて雉の羽根で指示しながら説法するという方法で今日の視聽覺教材の一つである紙芝居に類似しており、この視聽覺表現形式は、昭和五十年代から、東京の下町に発生した街頭紙芝居の元祖ともいえることができよう。

室町期（十五世紀）にはいると熊野巫女のみならず、神社に属する賤民たちが、絵解き師として独立して活動を行ないはじめた。したがって、教材としてのその絵巻物の需要も増加して、ついに、それらは印刷物として複製されるようになった。「融通念仏縁起」などは、複製絵巻物の一例であり、わが国における民衆教化の資料として最初のものである（加藤秀俊「見物からテレビ」参照）。

また、今日、視聽覺教材の一つである模型類に属し、ひな型経験を与える教具が、八世紀の初期につくられている。当時は、貴族が衛士や防人として徴集した庶民の壮丁たちに武術の教育を行なう必要からその練習用の武具をくふうして使用していた。このことは、武術教育用の準教科といわれている「筆記物語」（小弓、篠矢、小馬、鹿の類など）ができた十三世紀の初頭であったことをみると、文字を教育の手段としたことよりも早くくふうされたひな型経験の教具として考えられる。これら武術教育用の教具は十一世紀にはきわめて一般化し普及している（『授業の科学』第五卷、第一章、Ⅱ、参照）。

中世教育史の中で、従来、主として研究されてきたものは、足利学校、金沢文庫などの教育機関、禅林教育、世阿弥の芸能教育、武家の家訓、寺子屋の起源、そして往来物の研究などであった。このうち、特に挿絵入りの往来物については、次の世代である近世における庶民教育の教科書としての往来物との関連を考えると重要な意味をもっているといえる。また、この期に、講、組、寄合などがつくられ、そこでの特に宗教的な心意伝承による教化がいかに庶民の情操の上に多くの影響を及ぼしていたかは社会教育史の研究課題として、また、視聽覺教育の観点からその教化の方法は今後の研究課題でもあろう。

近世にはいると、教育の体制は、武家の教育と庶民の教育とに分かれていった。武家の子弟を教育する学校においては、中世以来の伝統が受けつがれ、中国の古典である四書五経をその主な教

科書とし、その素読によって暗記することを学業としていた。これに対して、庶民教育は日常生活に必要な実学を修得するため、生活の現実から編成された内容である読み、書き、算盤を主とした。そして、このような内容を教えるために、直観教育法が採用されていたことは必然的な結果であるといえる。

その一例に、近世になって、庶民の日常生活に必要な基本文字を教える初歩本としてあげられている教材には、「四言対相」（中国において編さんされたもので、一ページに四つの文字とそれを現わす絵が横にかかれてある小冊子）がある。さらに、この本よりも多くの挿絵を挿入して、子弟の初歩学習に視聽的な方法を取り入れたものに「訓蒙図絵」がある。これは、自然や社会のあり方などを図解によって詳細に描いた絵解き百科全書ともいえるものでその種類も多く、内容もさまざまで当時かなり一般に普及した通俗書といわれている。また、この本は、教科書としても幼児から成人にいたる広い対象に、多種多様な知識を、容易に理解させ得たものといわれている。

つぎに、近世の社会教育史にかかすことのできないものに、石田梅巖の心学がある。この心学の教化方法は、たしかに講釈の中にその全生命を打ち込んだことはよく知られている。しかし、この口で説いて耳に聞かせる方法の道話とならんで、この心学の教化方法は目に訴えて、心にしみこませようとする企てが行なわれている。

江戸中期以後の庶民は、寺子屋や郷学の発達、平民文学の普及

などによって、次第に文字に親しんできたとはいえ、むずかしい漢字には近づけないのが一般の傾向であった。当時、学問といえ、難解な漢字の積み重ねでありしかもむずかしい思想は伝達しにくい情勢であった。心学者たちの教化方法は、それだけに、なみなみならなくふうが重ねられていた。

この心学の目に訴える教化方法をいれた理由として次の四つの理由があげられている（石川謙「心学」参照）。

一 講釈や道話で話して聞かせた要旨や、力説した点を刷り物にし、それによって、説話の要点を明確に印象づけるため。

二 刷り物を聴衆の手もとに保存させて、聞いた話を思い出させたり、考え深く味わわせたりするため。

三 講席からはなれて、単独に刷り物だけでひろく教えを伝えたり、日常生活の心得を、あるいは重点的に、あるいは納得の行くように、親切にいいに説くため。

四 講席へ出席できなかった人、出られぬ時にも働きかける方法で、一枚刷りのものならば、（刷りものは、一枚刷り、小冊子、単行本の三種あった）家の中の壁、ふすま、屏風（びやうぶ）にはりつけておき、日常生活の中でその教えにふれさせる機会をつくるなどのため。

このような教化の手段は、もちろん庶民教化という心学の使命から生まれたもので、その文体の中には、俚語体（都々逸、数え唄、短歌体（和歌、道歌、狂歌）、長歌、標語体（単語、短句、警語）、俚語体（格言、俚諺）文章体（家訓、遺誠、説明文、教訓

文、消息文、その他）など六つの文体を含んでいる。

これら印刷物（「施印」といっている）のうち一枚刷りのもののうち、たとえば、安永二年（一七七三年）——注、梅巖の没後約三十年後）のころ出版された、梅巖の高弟の一人であった手島堵庵の一首ごとに別々に刷り上げた「いろは歌」俚語体（これは京都逸聞の）と短歌体（和歌）などは、上部に文字を、そしてその意味を漫画風の風刺面に下の部分に描いてあるもの。また、堵庵の俚語二十首のうちの第一首「何がそだてたが養うて」というのを下河辺拾水の絵をそえているもの、さらに教訓体とよぶものの中にも、善への導入を正面から説こうとする方法をとっている。

堵庵の「商人一枚起請文」、「慾と無慾の弁」（鎌田一窓「一七二一年——一八〇四年」の「書へひかれる道」、「諸願成就」、「気の毒の弁」などに対して、裏面から誘いかける逆説的な方法を用いた。

中沢道二（一七二五年——一八〇三年、江戸）の「うかうかといふてうかうか」、「鬼の相」など教えようとする内容と逆の題名をかかげて、よむものを深く考えさせようと仕組んだ方法がある。

このほか、庶民の生活の日々見、ききし親しんでいる世事世相、信仰、遊芸などを取り上げて説き、途中から突然、精神、道徳の問題にすりかえる方法をとっているものもある。「男作五厘金」はその一例で、当時歌舞伎芝居で人気を呼んでいた俠客五人男のいでたちや似顔を大写しに描いて、「勇なきよわものの看板なり」と注をつけ、また「影ぼうしは心のすがた」では、手指で作り出す影ぼうし二十種ほどを絵解きにして、その下に影は心のすがたとい

う意味の一文が添えてある。さらに、滑稽文（狂文）の形をとった「かなめ草」（一七八九年刊の中にある「浮世面づくし」は、上欄を二段に仕切って、生活の生感の中に現われるいろいろな感情を、えびすの面からうそつきの面の十二種をならべた絵をかかげ、その下欄に文を書いている。

このようなわが国における、絵解きの方法による庶民教育の方法は、西欧教育史におけるコメニウスの「オルビス・センシユアリウム・ピククス」（一六五八年刊）——世界図絵——の絵画（挿画）——による直観教育方法とその原理においては同様であろう。

教科書に絵画を入れることによって内容を直観的にしかも具体的に理解させようとする方法は、江戸時代の庶民学校としての寺子屋の普及に伴って、数多く刊行され供給されるようになりいっそう顕著になってきた。

近世も江戸時代にはいると、庶民の子弟を教育する場として寺子屋が普及するようになると必然的に教材が必要とされた。寺子屋での教授内容は制度的に一定したものではなかったが、習字を主とし、読書を加えたものが多く、それに算術（そろばん）を加えたものも少なくなかった。教材としては、町村名、書簡文などの実用的な手本のほか、往来物などが使われていた。男子用には実語教、童子教、四書、孝経。女子用としては百人一首、女小学などが用いられていた。これらのうち、「実語教」についてみると、巻頭に、「山高きが故に貴からず」など韻をふんで朗誦するように書かれ、その上部五分の一度度をさし絵でうめて、内容の理

解をたすけている。このような編集方法は、算術の教科書である「塵劫記」も、そろばんの珠の運びを図解して示すなど、その効果を意識してつくられている。また、「庭訓往来」は、武家の日常生活に用いられている多くの単語を、書簡文の様式にあらわし、これらの単語を教えることをねらいとしたものであったが、これも、単語の示している実体をその文字の下に絵であらわし、子弟の日常生活に必要な単語の読み書きを学ばせるとともにその文字の示す実体を容易につかむことができるように考えられていた。また、このほかに「商売往来」「諸職往来」などの刊本にも絵解きをつけたものが少なくない。

このように庶民教育の教材として編集され、刊行された教科書は、言葉（書かれた言葉としての文字を含めて）が表わしている事物や現象を絵図によって解説したものが多くあった。この意味は、寺子屋における子弟の教授内容をできるかぎり現実的にするという庶民的な教育技術の現われであり、近世、特に徳川期における絵画による視覚教育の方法を自らの教育様式として提唱し、実践したものとして高く評価されてよい。

さらに、今日のマス・コミと社会教育という観点から、歴史をふりかえってみよう。寺子屋の形態が整っていなかった。室町時代から江戸初期までは、前述のような読み、書き、そろばんなどの教科に相当するものがなく、したがって教科書に準ずるものもなかった。そのころ、武士や庶民の間にひろく読まれた読みものは、太平記のような軍記物、前にのべた往来物、および一寸法



師、酒吞童子、浦島太郎などのいわゆるお伽草子などがある。これとお伽草子は、福富草子をはじめ、そのころ語られていた童話を、文章と絵画によってつくられており、広く読まれていたという。このことは、当時庶民の家庭の幼児たちに与えたその影響はまことに大きなものがあつたことが考えられる。このお伽草子が、明治、大正、昭和と年を追うごとに、草双紙となり、絵本にかわつて、今日、わが国の子どもの絵本の蔵書数は世界一といわれているまでになっている。幼児が絵本の絵を通じて、自分の身のまわりの器物の名前をおぼえ、また、望ましい行動様式も相似的に学習することは昔も今も変わることはない。このように絵本の教育的な機能を考えると、お伽草子から今日の絵本までが、そのまま、われわれ日本人の精神形成の歴史の一部として重要な役割をもつことを考えたい。

さらに、明治期以前の社会教育の役割をはたしていたと考えられるものがある。それは今日のマス・コミに相当するものとして興行ものである。

藤原衛彦「見世物史」によると、わが国の見世物の起源を、一四四九年、京都、清水にあらわれた八百比丘尼をはじめとしている。そしてこの見世物が、民間信仰と関係がありわが国の見世物の発生の時から宗教性をもっていたこと、その宗教性が長くわが国の見世物史の中心的な要素であることを説いている。

その具体的なあらわれは、奇型な人間(小人、ロクロ首などの)や身体不具者を見せ人間の悪業の証拠として因果応報を説き、罰

の感念を庶民にうえつけていた。その説くところは前近代的な道徳哲学であるにせよそれらは第二次世界大戦以前まで長く続けられてきた。それらは神社、仏閣の境内での小屋掛けでの興行であったり、江戸後期の鶴屋南北の因果果劇であり、明治中期の三遊亭円朝の怪談につながり、いわゆる視聴覚的な手段によって、大衆の心性にぐい入った見世物もっていた宗教的な教訓の効果は見のがすことはできない。さらにこれらの見世物は単に娯楽としてのものでなく、その内容には道徳性を主題としたものが融合し一体化したものであつた事実で、見世物は娯楽であると同時に、道徳教育の場であり、道徳性を強調すると同時に、娯楽性を正面に押し出している点は、今日のマス・コミの現状をながめると、社会教育の立場からは一つの示唆を与えるものがあろう。

以上のように、明治期以前の庶民教育、特に近世の庶民教育は、庶民生活の現実的なものに深くその根を下ろすようになる

と、自ら視聴覚的方法を展開させるようになったことが特質といえよう。

## 二、通俗教育の時代

通俗教育とよばれる時代は、およそ明治期の民衆教育をさしているのが普通である。

しかし、行政上の機構のなかにはじめて通俗教育の語が使われたのは、明治十九年二月二十七日付の文部省官制が定められたときである。

大臣官房総務局、学務局、編輯局、会計の四局が設けられ、その学務局第三課の事務所掌に「第三課ニ於テハ師範学校幼稚園及通俗教育ニ関スル事務ヲ掌ル」とある。その後、大正八年六月二十一日、文部省官制が改正され、普通学務局第二課が設けられて、通俗教育・図書館および博物館、青年団およびその他に関する事務をつかさどる、今日いわれている社会教育に関する主管課が新設された。ついで、大正十年六月二十三日、文部省官制の改正の際、従来用いられていた通俗教育という語を社会教育に改めた。しかし、この前年(大正九年五月)、各地方庁学務課内に社会教育担当の主任吏員すなわち社会教育主事の特設するよう各地方長官あての通牒が出され、さらに大正十年十月には、文部省主催の第一回社会教育主事協議会が開かれたという経緯もあった。したがって、通俗教育の時代という分け方を正確にいうならば明治初期から大正中期末までということが適切になるわけである。

明治五年八月三日、学制が發布され、近代学校への歩みをはじめられた。同年九月八日に「小学校則」が制定され、同年十月には文部省内に教科書編成掛がおかれたが、その年の十一月にはその係は東京師範学校に移され編輯局となった。そして、ただちに小学校用教科書の編集に着手した。そして、まもなく教科書、諸掛図が出版されるようになった。この編さんの指導にあつたのは米国人エム・エム・スコットである。スコットは、明治四年八

月来朝し、大学南校の教師をしていたが、同氏が米国における師範学校教育に理解と経験をもっていたことから東京師範学校に招へいた。師範学校においては米国の小学校そのまゝといつてよい教育方法がとり入れられ、当時米国の小学校で使用していた教科書、教具、機械類などがいっさい注文しとりよせられてから授業をはじめたという事情であった。したがって、わが国の明治初期の教科書が多く米国教科書のほん訳であったことも理解できる。この時に編さんされた諸掛図のうちによく知られている「単語図」「連語図」などがある。また、掛図の一つに「教育錦絵」がある。この教育錦絵は、明治六年ごろ、修身や理科関係の教材を錦絵大の堅絵にし、淡彩をほどこした四、五種の「文部省製本所発行記」の印記付きが出版されている。江戸中期に最も隆盛を示した錦絵の技術を近代学校の教材に活用したことのもつ意味はまことに興味ある事からである。

学校教育における視覚教材のこのような動向に対して、通俗教育の分野においては、明治六年、文部省は、就学前の幼児の家庭教育を助けるために一つの方途を講じている。それは、次のような通達によって知られる。

(原文のまま)

明治六年十月七日

第百二十五号 文部省布達

幼童家庭ノ教育ヲ助ル為メニ今般当省ニ於テ各種ノ絵圖玩具ヲ製造セシメ之ヲ以テ幼稚坐臥ノ際遊戯ノ具ニ換ヘハ他日小学就

業ノ階梯モ相成其功少カラサルヘク依テ即今刻成ノ面四十七種  
製造ノ器ニ品ヲ班布ス此余猶漸次製造ニ及フヘク入用ノ向モ之  
レアラハ本省製本所ニ於テ下候條此旨布達候事

この四十七種の絵は、「西洋器械發明者の像、わが国の子どもの  
遊戲に勸戒發明を示唆した摺物」などで、製造の器とは「札で字  
を作る工夫したもの」と「建家の仕掛」で、積み木の類のもので  
あったらしい。

これは、文部省が、社会教育用に視聴覚教材を頒布した最初で  
ある。

文部省が、近代的な視覚教材を教育の場に利用させようとした  
最初の方策は、明治十三年（一八八〇年）である。当時、すでに  
各府県に師範学校が設けられていたので、これに對し教授用教具  
の奨励品として、幻燈機および写真スライド（ガラス製のもの）  
を頒布している。しかし、その製作費は当時としては高価（スラ  
イド一枚一円）すぎたことから、この事業はわずか三年後の明治  
十六年に中止された。しかも、この間、文部省に備えてあるこれ  
らの教具を、東京府下および近地の学校からの希望によって貸し  
出すという制度も実施していた。

このことは、今日の視聴覚ライブラリーの原形としての機能を  
考えた制度であったといえる。

この画期的な事業を遂行した中心人物は、わが国産業教育界の  
大先輩である手島精一である。「嘉永二年（一八四九年）生まれ、  
大正七年（一九一八年）卒去」。手島は、明治三年、米國に留学、

欧州を経由して明治七年の秋帰朝した。そのとき、スライド七十  
枚（ガラス製のもの）を持ちかえった。これらは、天文十七枚、  
自然現象十二枚、人体解剖二十枚、動物二十一枚で教材用のもの  
ばかりであった（稲田達雄「幻燈の生いたちについて」参照）。手  
島は、明治八年、東京開成学校の監事となり、明治九年、米國フ  
ィデルフィアの万国博覽會に、文部大輔田中不二磨の随員とし  
て再度渡米、翌十年に帰國し、教育博物館次長となって、社会教  
育にその手腕を発揮した。教育博物館には、多くの教育用品や参  
考品を展示し、一般民衆に直接役だつ教育機関とし、さらに、月  
一、二回ずつ一般を対象とした通俗學術講習会をひらき、スライ  
ドの利用をはかるなど、社会教育における視聴覚教育の先駆者とし  
てもその功績はまことに大きい。手島は、その後明治三十年十  
一月から明治三十一年一月の間、文部省普通学務局長をつとめ、  
後、東京高等工業学校長などを歴任している。

この手島が、文部大輔の田中不二磨（明治十二年九月十日退  
任、司法卿に榮転している）にすすめて、明治十三年、前に述べ  
た師範学校向けスライドの頒布の事業が実現されたものと考えら  
れる。さらに、この事業の実施について、述べておかなければな  
らない人物が二人いる。それは、文部省がその幻燈機やスライド  
を製作させた鶴淵初蔵と中島精一（待乳又は真乳と号す）であ  
る。

鶴淵は、二十歳ごろまで巾着屋（小間物商）を業としていた  
が、明治初年のころ写真屋を兼業し、生とり写真を撮っていた。

明治四、五年ごろ彼が二十四、五歳のときに、外国人（オランダ  
人ともいわれている）が幻燈をもつて来たのに関心をもち、その  
製作技術の伝授をうけて幻燈面の製作を始め、東京、浅草並木町  
四番地に鶴淵幻燈館を開業したのが明治七年であった。これがわ  
が国の最初の幻燈製作業者であらう。なお、当時この業界の競争  
相手として吉沢商会というのがあった。鶴淵初蔵は、明治四十二  
年六十三歳でなくなり、その息近之助がその業を継ぎ、明治四十  
五年、神田表神保町に、さらに根津西須賀町に移って、大正年間  
を経て、昭和十九年、三代目の当主鶴淵武夫が、第二次大戦で比  
島方面に出征、生死不明になるまでの間、鶴淵幻燈活動教育社と  
して存続していた。ついでに、大正五年十二月、当時鶴淵教育幻  
燈活動製造合資会社としての幻燈器械及映画、活動機及活動画定  
価表によると、これには、教育幻燈面が、學術、宗教、教育、衛  
生などの分類によるもの一六二組三、六三七枚の多数にのぼり、  
活動画（映画フィルム）も一〇〇以上（このところ落丁がある。）  
を製作販売していた（以上鶴淵に関することは、稲田達雄所有の資  
料による）。

中島精一については、現在のところ、理科学方面に理解の深か  
った写真師であったというだけで、これ以外は明らかではない。

ここで「幻燈」という名称についてふれておこう。このよび名  
は、手島精一がつけたといわれている。また、文部省が教育用に  
奨励品として頒布した明治十三年から「幻燈」という名称が固定  
したといつてよい。手島がこの語の發明者という理由はある。手

島は、明治三年、初めて渡米する以前、大学南校の英語科の大助  
教柳本直太郎の書生として、洋学を勉強していた。そのころの英  
語の学習には「英和对訳袖珍辞書」（文久二年一八六二年発行）が  
使われていたようである。この辞書では「Magic Lantern」を  
「幻燈」と訳してある。手島も多分この訳語を用いたことと考え  
られるからである。

先きのべた明治六年、家庭教育のための視覚教材の頒布と、  
明治十三年から三か年間にわたって、教員養成機関に対する近代  
的視覚教材の提出という、文教行政の発足当初にとられた視聴覚  
教育についての方策は、明治十六年で中止され、以後、明治四十  
四年まで行政上に視聴覚教育関係事項は見あたらない。

しかし、この行政上の空白時代に、民間において、通俗教育に  
スライドの利用に苦心努力し、全国に普及させた人びとがいる。  
それは先きに述べた文部省が幻燈の製作を依頼した、鶴淵初蔵と  
中島精一である。この両者は、文部省が、幻燈機およびスライド  
の頒布を中止したことを遺憾として、この有益な装置を民間にひ  
ろめようと考えた。

明治十六年三月、「教育幻燈会」をつくり、江東井生村楼に無料  
公開し、つづいて各地を巡回して宣伝普及につとめた。しかし、  
その上映したものが専門的なものや學術的な教材スライドであつ  
たことから、一般の関心は薄かった。ときには地方の教育会から  
出張上映の依頼もあったが、この時代はまだ幻燈の教育的利用を  
受け入れるには遠かった。その後「大日本教育幻燈会」と改め、

なお教育スライドの利用普及につとめ、明治十九年ごろから徐々にその努力が実を結びはじめた。明治二十年代は、歴史上画期的な時代にはいる。二十二年二月十一日、憲法發布、翌二十三年十一月二十九日、第一回帝国議会開会、また、国民自由党の結成など政治様相は一変すると同時に、教育面においても、明治二十三年十月三十日、教育に関する勅語頒布により、教育の目標が明示されて、一般国民も教育に対する関心も次第に高まり、学校教育にとどまらず、青年教育から成人教育への関心も強くなり、青年会、報徳社などの社会教化団体が結成され、社会教化運動が活発化してきた。このような情勢の中に教育幻燈会の事業も漸次全国に普及し、明治三十七、八年ごろ、活動写真のぼつ興まで二十余年にわたってわが国の通俗教育における幻燈利用の一エポックを築いた。

明治二十七年、日清戦争がはじまると、各種の社会教化団体の活動は戦意高揚に集中し活発化してきた。教育幻燈もこれに協力、巡回幻燈映写会が各地で開催されていった。二十七年には、戸田氏共伯爵（宮内官、式部長官、安政元年六月二十六日生、昭和十一年二月十七日没、八十三歳）を会長に、鹿島清兵衛の尽力によって「日本幻燈会」が組織され、さらに同年、鹿島が発起人となり「報国幻燈会」をつくり、教育幻燈が、戦費、義損金の募集にあたる等、その社会的な貢献は大きなものがあった。なお、この鹿島清兵衛は、慶応二年、兵庫に生まれ、明治から大正期にかけてわが国の写真界の貢献者といわれている。写真の技術的な

研究に、また、幻燈利用の普及に経済的な支援者でもあった。後年は余りめぐまれず大正十三年八月六日没した。

日清戦争が終わって、幻燈映写会は、社会けいもうの役割をになって普及して行った。その映写内容は、皇室関係、歴史、時事、保健衛生、文芸などのものであった。このような普及活動が続けられているうち、明治三十七、八年、日露戦争が起これ、幻燈は再び国民の戦意高揚と情報宣伝のために活用され全国的に巡回映写会が開催された。

\* \* \*

以上のように民間における幻燈利用のはなやかな活動も、日露戦争の終了とともに、そのころ、活動写真が輸入され、一般に普及するにしたがって、一般の興味から次第に離れて行き、その影を薄めていった。

明治十六年以降、二十数年間にわたって、民間の人びとの努力によって異常に発達した通俗教育における幻燈利用は衰微し、昭和十五年ごろまでの間いわば幻燈空白時代が現出した。

（社会教育局視聴覚教育課専門員）



編集後記

★さる四月二十八日、中央教育審議会第二十特別委員会は「後期中等教育のあり方について」の中間報告を公表しました。本誌でも、すでに五月号でこの報告の全文を掲載しておきましたが、それと関連して、本号では後期中等教育の問題を中心に編集しました。座談会では、「後期中等教育のあり方について」と題し、中間報告の内容にたいする感想、批判、要望などを多角的な視点から問題にしています。出席者は、第二十特別委員会の主査であり、この中間報告を、中心となつてまとめられた平塚益徳先生をはじめ、各界を代表される諸先生方においてをいただきました。

報告では、とくにわが国の教育とその社会的環境に関して、反省すべき問題点として、(1)学校中心

の教育観と学歴偏重、(2)かたよつた能力観と職業に対する偏見、(3)学校教育の形式的平等と画一化の三点をあげておりますが、本座談会がこうした課題を具体的に考える場合の手がかりとして、役だつものと思います。

★後期中等教育の特集として、そのほかに、各種学校、勤労青少年の教育をとりあげましたが、とくに特殊な事例として一般から注目されているNHK学園を紹介しました。この学園は通信教育の学校としては、全国を一つの学区とした広域通信制高校であり、全国どこに住んでいてもこの学園への入学資格があること、またラジオ・テレビの放送利用を理想的に行なうことなどに特色があり、昭和四十年では一万三千人の働く青少年がここで学んでいます。

MEJ 9476

文部時報 七月号

第一〇六七号

昭和四十一年七月五日 印刷  
昭和四十一年七月十日 発行

著作権  
所有 文 部 省

所 有 権 株式会社 帝国地方行政学会

発行者 株式会社 小川平二

東京都立川市曙町三の五五

印刷所 株式会社 行政学会 印刷所

東京都新宿区西五軒町五二

営業所 株式会社 帝国地方行政学会 館別

電話 (268) 二二四一代

振替口座 東京二〇、〇〇〇番

購 読 料

定価 一冊 七十円  
送料 〃 六円  
一か年 八百四十円

(前納の場合は送料不要)

ただし、増大号臨時号の場合は別に代金を申しつけます。なお購読の申し込みは、直接発行所またはよりの書店にお願いいたします。



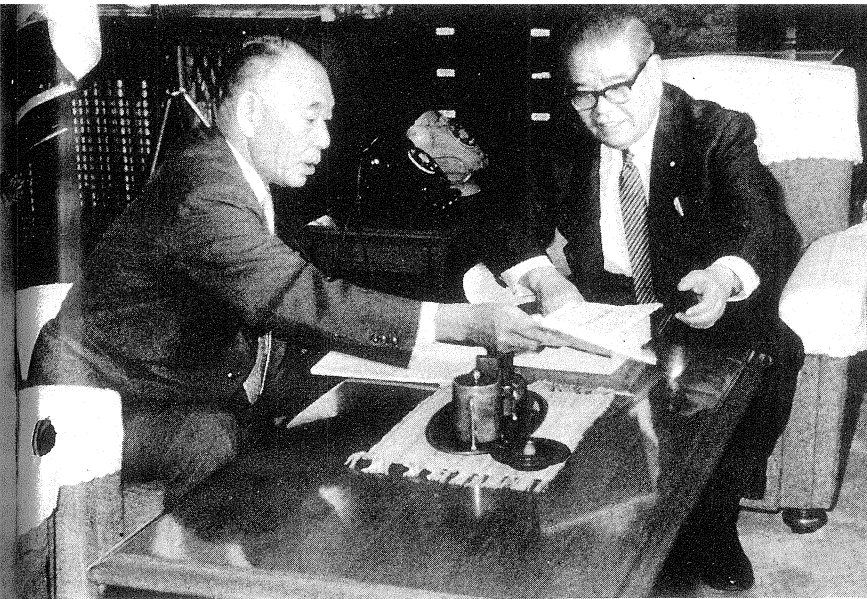
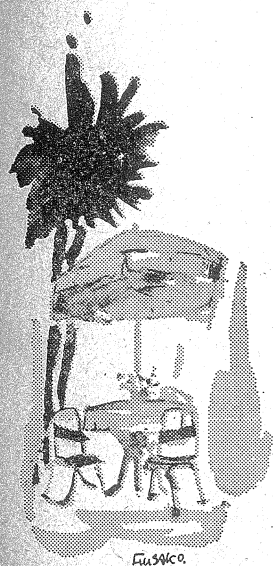
# 文部時報

第 1068 号

昭和41年 8 月

教育計画の意義	天城 勲	2
ヨーロッパ諸国における		
教育計画の類型	宮本 繁雄	15
アジア諸国の教育計画と日本の寄与	阿部 宗光	20
地方における教育計画の諸問題	菅井栄一郎	28
調査統計と教育計画		
——文部省の機構改革に関連して——	西田亀久夫	37
道徳指導資料とその活用	青木 孝頼	44
小・中学校における学校放送の利用	斉藤伊都夫	56
~~~~~		
教育用語「教育人口」とは	笹岡 太一	50
随想「豆粒からカギっ子への連想」	北岡 健二	63
連載第七回		
人物を中心とした社会教育史		
「視聴覚教育」(その2)	鈴木 勉	74
~~~~~		
<新刊紹介>		
「教育計画」 ユネスコ編	田村 武夫	68
木田宏訳		
資料		
・都道府県における長期総合教育計画一覧……………	70	
・都道府県における長期総合計画一覧……………	72	
文部省の会議・行事等から……………	52	
文部省重要通達一覧……………	95	

表紙 松村 優 カット 須貝夫早子



## 新文相に有田喜一氏就任

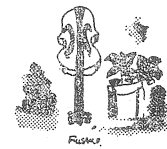
7月31日の佐藤内閣改造により、衆議院議員の有田喜一氏(明治34年兵庫県生まれ)が文部大臣に就任した。8月1日認証式をすませ、初閣議後文部省に初登庁した有田文部大臣は、大臣室で中村前文部大臣から事務引継ぎを受け、文教行政へのスタートを切った。また新政務次官には、衆議院議員谷川和穂氏(昭和5年東京生まれ・広島県選出)が就任した。〈写真=大臣室で中村前文相から事務を引き継ぐ有田新文相㊦〉

## 冬季オリンピック等準備室が誕生

1972年札幌オリンピック冬季大会と来年のユニバシアード東京大会を成功させるため、文部省体育局(4階)に冬季オリンピック等準備室を置くことになり、8月1日から準備事務を開始した。〈写真=中村前文相の筆になる準備室の看板を掛ける赤石体育局長〉



# 人物を中心とした 社会教育史



鈴木 勉

## 視聴覚教育（その二）

### 二 通俗教育の時代（承前）

エジソンが映画「キネトス・スコープ」（のぞきめがね式のもの）を発明し、ニューヨーク市で一般に公開したのが一八九三年（明治二十六年）である。それからわずか二年後の明治二十八年大阪道頓堀中座の座主三河彦助が、南地演舞場を借り入れ、これを活動写真と名づけてわが国で最初の公開をしている。こののぞきめがね式の活動写真機とフィルムは、そのころ、大阪市東区久宝寺町の雑貨商であった荒木和一が渡米する際、前記の三河彦助が、何か珍しい興行ものを買うよう依頼し、荒木が、五千ドルで購入したものであった。フィルムは五十フィートほどで、アメリカの風景を撮影した実写のものであった。こえて、明治二十九年、荒木和一はさらに、エジソン式ヴァイタスコップ（今日の投影式の映写機と同じ方式）を輸入し、同年二月、新町演舞場で公開し、翌三十年には道頓堀の角座と弁天座で興行した。これらはいずれも連日大入りの盛況を呈した。なおこの明治二十九年には、神戸の貿易商であった高橋信治と大阪の時計商三木福助が共同して、エジソンのキネトス・スコープを輸入し、同年十一月二十五日から五日間、神戸市神港クラブの貸席で公開している。

らである。

明治三十三年（一九〇〇年）北清事変が起きると日本活動写真会は、技士柴田常吉と深谷駒吉を従軍撮影に派遣し、同事変の記録映画を製作した。これを東京をはじめ全国各地に興行し、めざましい反響をよんだ。そして、この興行収入の半額を日本体育会に寄付していた。この日本体育会は、明治二十三年、体育の奨励普及を目的として創立された団体で、当時、会長は男爵黒川道軌であった。この体育会は、その奨励普及のため全国の小学校を巡回して講演会や活動写真会の開催を行っていた。この事業を担当していたのが杉田亀太郎であって、杉田は活動写真の教育的利用を主眼として、この事業に専任し、やがて、「通俗教育活動写真会」を設立、文化水準の低い初期の興行者の間にあって、特異の存在を示した。

これが、通俗教育と活動写真との最初のつながりであろう。また、明治三十四年になると、東京に、成人を対象とした「教育活動写真会」なるものが開催されはじめた。このことは、北清事変の記録映画の公開によって映画のもつ実写的な力と教育的な価値を合わせて一般に訴えようとしたものであって、前記の通俗教育活動写真会とともに、社会教育への映画利用の民間における先駆的な事業といえよう。

明治三十六年十月、東京浅草に、わが国最初の常設活動写真館が生まれた、電気館の発足である。活動写真が興行として繁栄時代はこれからはじまるわけである。

ここで、通俗教育の立場から一人の人物を紹介しておかなければ

フランスのリュミエール兄弟は、シネマトグラフ（放映式のもの）を一八九五年七月上旬（明治二十八年）、マルセイユで公開している。それから二年後、京都の染物業者であった稲畑勝太郎（元大阪商業会議所会頭）がフランス留学時代、その友人であったオーギュスト・リュミエールから求めたシネマトグラフを「自動写真」と名づけて、明治三十年二月十五日、大阪南地演舞場（現在の南衛会館）で公開した。この半月後、明治三十年三月六日、東京、神戸の錦輝館では、米国製のヴァイタスコップが、雑貨貿易商荒居商會によって「活動大写真」と名づけて公開されている。稲畑がフランスからもちかえたシネマトグラフは、その後、神戸内外物産会社員横田永之助が、これを借り受け、京都に横田商會の看板を出して、わが国映画事業の創始者となった。その後、横田は、フランスパテー兄弟商會と特約して、日本代理店となり、三十三年ごろから映画フィルムを輸入し、全国週間興行班を組織してわが国民に映画というものの認識をひろめた。

このように、わが国における映画の輸入と一般への公開は、いわば珍奇な見世物として登場してきた。しかし、この映画の公開の宣伝文は、「人間の知見を拡充する教育の一大資料」という表現で、人びとは初めて接する動く写真の迫力に心をゆり動かされて圧倒的なかっさいを送った。もちろん、宣伝文に強調された教育的利用価値は単なる手段であったが、映画はその登場の当初から見世物と教育性の両面を兼ね備えるものとして考え扱われたのであった。

通俗教育と映画が直接に結びついたのは、明治三十四年ごろか

ばならない。それは、梅屋庄吉（号を正人という）である。梅屋は、明治元年十一月、長崎市の精米業の家に生まれ、十五歳の時には早くも父の持船で上海を往復していた。十九歳の時、韓国の飢きんに精米六百石を積んで渡航、巨利を得、二十五歳からは、中国、南方に出むき、孫逸仙の反清運動を応援するなど覇氣のある事業家であった。明治三十九年、梅屋は、シンガポールで、フランスのパテ映画社のフィルムを仕入れて帰国、三十九年七月四日から十日間、東京新富座で、活動写真の旗あげ興行を行なった。その後、明治四十一年五月、東京牛込神楽坂上に「文明館」の名称の映画館を開館し、M・パテ商会の看板をかけた。（このMは、正人の頭文字をとったといわれている。）活動写真興行をつづけた梅屋は、活動写真に対して、「活動写真は、下等な興行師のやるものではない。これは、社会改良家のやる仕事である。」と自負していた。この抱負は、明治四十四年ごろから教育映画を多量に輸入し、興行映画の番組の中に、必ず二、三篇の教育映画を入れて上映していたことによっても裏づけされ、その後、その教育映画の目録を印刷し、「活動写真百科宝典」と題して出版し、全国の学校、（当時、小・中学校合わせて約二万五千校）および図書館（約五百館）に対し、無償配布し、教育映画の利用をうながそうと努めている。なお、梅屋は、明治四十五年、白瀬大尉の南極探險の実写映画を製作したこと、日活活動写真株式会社の創立（大正元年）の主要人物であったことを追記しておく。映画の興行化に対して、非興行的利用もようやく活発化してきた。

明治四十一年大阪毎日新聞社が、読者へのサービスのために巡回活動写真班を創設した。このころから、わが国でも興行用の映画が製作されはじめると同時に、社会教化、広告、宣伝などのための非興行映画もつくられるようになり、教育映画会的な性格をもつ催しが全国各地に開催され活発化してきた。こうして、明治中期に盛況を見た教育幻燈会は、次第に後退し、教育映画会が登場してきた。

なお、官庁事業の広報に映画が利用された最初は、明治四十三年、「通信鉄道現状報告活動写真会」が東京で開催されたものである。

明治末期、当時福宝堂という興行映画の製作、興行を行っていた合資会社（創立明治四十一年）があった。この会社が、明治四十四年、フランスから探偵活劇映画「ジゴマ」を輸入。公開されると青少年の熱狂的な歓迎を受け、ジゴマごっこが各地に流行して世人の肩をひそめさせた。この流行は、和製ジゴマ映画の製作、上映ともなるほどであった。このような風潮に刺激された世論は、にわかに映画の悪影響（特に青少年に対して）を問題にしはじめ、全面的な観覧禁止の必要性が広く強調されるようになってきた。

俗悪映画を禁じようとする社会的な動きはこのときにはじまった。そして、映画は教育的な関心の対象となった。しかし、教育の中では、このころから、しばらくの間、児童教育とこれら興行映画との関連において、特に排撃という形をとった教育的指導の側面だけが議論の中心になっていた。この傾向は、最近の興行映

画の動向と青少年の非行化の社会的問題としてとり上げられている一面の事態と本質的に類似したものがある。

このような動向に対して、文部省は、映画の指導方策の整備充実をすすめることになった。もっとも、文部省はこれ以前は民衆娯楽の改善に着目し、特に学校教育・社会教育の見地からのその影響の大きいことに深い関心をもっていた。

明治四十年代の初頭に、国民教育制度全般の拡充方策が立てられた際、通俗教育の分野においても、これを整備充実して国家の発達に沿わせる方策を立てることになり、明治四十四年五月十七日、通俗教育調査委員会官制が定められた。この委員会の委員長には、当時文部次官の福原鏝二郎が任命され、通俗教育全般に関する文教方策を検討することになった。

四十四年七月、この調査委員会は、部会規則を定め、（このころの主管は、普通事務局で、局長は、田所美治であった。）その第二部会において、「幻燈の映画及び活動写真のフィルムの選定・調製・説明書の編輯等に関する事項を掌る」ことになり、これによって、当時、通俗教育としての教育行政の一部に加えられていたものが、その後、大正から昭和にかけて社会教育がしだいに振興される際に、これらの内容がその主要な分野を構成するようになったのである。

この委員会は、通俗教育における幻燈と映画の教育的な利用価値に着目して、明治四十四年十月十日、「幻燈映画ならびに活動写真のフィルム審査規程」を定めて、今日いわれる視聴覚教育に関する行政をはじめて行なうようになった。すなわち、この規程

によって、通俗教育の趣旨に適する作品に文部省認定済の名称を与え、官報公告を行なうことにした。この規程は、大正二年七月二十六日（文部省令第二十三号）「幻燈映画及活動写真「フィルム」認定規程」と改められた。この規程で認定を受けた幻燈映画は、大正十一年までに四十一種千九枚である（これ以後は、幻燈映画の申請は出ていない）。作品は、地理、風俗、史蹟等のもので、委員は、小川真、山崎直方等が審査にあたっていた。活動写真フィルムの認定数は、昭和二年十一月までに二七〇種六一九巻であって、その作品は主として、学校教育に関する教科書の補助となるもので利用範囲は限られていた。この規程は、大正九年二月から、映画等の推薦制度に改められた。この推せんについては、特に規程を設けることなく、推せん要項を内規としてつくり施行していた。その推せんの基準といえるものは、内容、形式とも優秀なものであり、その内容は教育的、娯乐的、芸術的の三つに分け、それぞれに観覧対象として成人向、児童向、あるいは、一般向などを指定することになっていた。なお、この推せんは主として興行映画を対象としており、申請の有無にかかわらず、社会教育委員会（大正九年五月、通俗教育調査委員会の廃止によって、新たに設けられたもの）の委員——橋高広（文部省嘱託、東京警視庁特別検閲係長）、星野辰男（文部省専任嘱託）、権田保之助（東京帝大講師）、菅原教造（東京女高師教授）などの四氏が委嘱され、興行映画の改善指導の見地から映画の推薦審査にあたった。これより以前、大正六年、地方においては、成人教育における映画利用が殆どしはじめていた。山形県社会課、神奈川県社会教

育課、千葉県衛生課および東京府地方課のそれである。また、中央官庁においては、逓信省貯金局および簡易保険局が、その事業の振興普及に資する映画筋書の懸賞募集を行なったこともこの種企画の先頭を切るものであった。さらに、この年に、文部省は単に映画、スライドの認定審査を行なうにとどまらず、興行映画の青少年に与える影響が次第に社会問題として大きくなるのにかんがみて、児童と興行映画との関係について調査を行ない、翌大正七年に、その結果をまとめて「教育と活動写真」を刊行している。これは、文部省における映画の教育利用に関する最初の資料である。ついで、大正九年には、「全国における活動写真状況調査」を実施している。

さらに、大正九年、文部省は、活動弁士の教養調査を行なった。調査対象の活動弁士は八百四十七名で、うち八割八分のもが小学校中退であることが明らかになり、このため、大正九年十月十六日「活動写真当業者協議会」を開催して、映画興行場における児童生徒の指導、文部省推せん映画の利用促進等を協議している。ついで、大正十年二月十一日から一週間、東京、浅草公園の仏教青年伝道館において、「活動写真説明者講習会」を開き、乗杉課長、権田保之助、星野辰男、橋高広、菅原教造、大島正徳（東大教授）などの講師によって、映画の芸術的価値、映画説明の社会に及ぼす影響力、説明者の使命等を講習するとともに、今後の研究と反省への指標を与えた。このとき、講習終了証を与えられたものは百七名であった。これを機会に、活動写真説明者の中にいくつかのグループを自主的につくり、進んで研修する動向

があらわれたことは、この講習会が時宜に適したものであり、説明者たちにじゅうぶんな反省を与えた証拠である。また、このことが刺激となって、関西にもこのような動きがはじめられた。大阪府学務課では、府教育会の事業として、活動写真の改善を計る目的と学生の思想善導をかねた推せん映画制度を実施することになり、大阪市内の有力な活動写真会社、松竹、日活、国活、帝キネの幹部を招き、大正十年六月二十二日、第一回相談会を開き、次の決議を行なっている。

一 教育的活動写真の普及を計る為に市教育当局者、市教育会、市民博物館、興行主代表は、時々会合し、相互の聯絡を保ち、又活動写真の改善策を講ずること。

二 教育部若しくは教育会にて教育的活動写真会を催す場合興行主より映画の提供をなすこと。

三 小学校等にて教授其他の為、活動写真を利用せんとする時には興行者側より映画其の他に便宜を図ること。

このことは、昭和四十一年度から、文部省が新たに実施した「教育映画の映画館上映」の事業における業界側の協力体制と考へ合わせてみると、まことに興味あるものがある。

以上、行政の上で、通俗教育といわれた時代における視聴覚教育、といっても主として興行映画に対する改善方策と映画の教育利用の第一歩の段階を概観してこの期を終わる。

### 三 社会教育の時代

文部省の行政機構の中で、通俗教育という名称が、社会教育と

改められたのは大正十年六月二十二日以降である。これは、この

日づけをもって、文部省官制の改正が行なわれ、普通学務局の第四課の所掌事務に、従来、用いられていた通俗教育の語を改めて社会教育としたことにもとづくものである。この名称の変更のめつ意義は、これを機として社会教育行政の整備に、また、振興上積極的な方途がとられたことといえよう。その後、行政機構は、大正十三年十二月二十五日には文部省分課規程に改正が行なわれ、社会教育課の新設。さらに、昭和四年七月一日、勅令第二一七号によって社会教育局が創置された。第二次大戦に際しては、教化局（昭和十七年十一月一日より）、教育学局（昭和十八年十一月一日より）、とその時代とともに名称は改められたが、戦後、昭和二十年十月五日、再び社会教育局に復活、今日に至っている。

この大正十年から現在までを、ここに社会教育の時代として扱うことにした。しかし、この間、第二次大戦の前後においては、社会教育においても、また視聴覚教育の分野においても、その内容、性格などの点で著しく相異なるものがあることは衆知の通りであるが、一項として述べることにした。

大正十年ごろから、文部省の映面对策は積極的になってきた。

当時、この事務の担当局は、普通学務局で局長は赤司鷹一郎、主管課長は乗杉嘉寿、担当は、文部属中田俊造・囑託青池忠三であった。これらの人びとによる積極策は、まず、大正十年十月二十日から三週間、東京・お茶の水の教育博物館を会場として、「活動写真展覧会」を開催したことにはじまる。この展覧会は、一日一万人をこえる入場者を得て、朝野各方面に映画の教育・文

化性を普及することにつとめた。

展覧会は、実行機関として協賛会を設け、その会長に後藤新平（東京市長）、副会長石井常吉（日活）、飯田愚（国活）、理事長新免弥雄（松竹）、主任理事志茂成保（大活）、トーマス・コクレン（ユニヴァーサル支社）、会計部長杉田龜太郎（日本フィルム）、接待部長岡本米蔵（岡本洋行）、宣伝部長高松豊次郎（活動写真資料研究会）がそれぞれ任命され、その顧問として、乗杉課長、棚橋源太郎、橋高広、権田保之助、菅原教造、星野辰男などがあげられている。この展覧会は、一般の映画に対する偏見を是正し、映画の教育的価値に対する社会的の関心を喚起する成果をあげ得た。

つづいて、大正十一年、文部省は、「映画閲覧館」設立の計画を発表し、東京上野に開催された平和博覧会の会場内に、教育映画を公開映写する活動写真館を建て、教育映画利用のけいもうにつとめた。

このころ、蓄音機の普及によって、レコードが、新しいマス・メディアとして広く一般にもはやされはじめた。この傾向にかんがみて、文部省は大正十一年一月、「蓄音機音譜推薦要項」を定め、同月十日、蓄音機レコード業者と、レコードの推せんについて協議会を開催。従来行なってきた映画、スライドの推せんとならんでレコードの教育的価値にも、着目することを明らかにした。これは、視聴教材だけでなく聴覚教材も取り上げられるようになったこの事態の新しい発展を意味するもので、聴覚教育への行政上での配慮は、このころからようやく具体化しはじめたわけ



である。

大正十二年四月二十三日には第一回の文部省推せんレコードが発表された。これは、教育的に価値のあるレコードを積極的にすすめる情懷教育に資し、また、音楽文化の向上をめざしていた。その審査には主として菅原教造（東京女高師教授）と田辺尚雄があつてゐた。（大正十二年五月四日、文部省令第二十二号「活動写真フィルム幻燈映画及蓄音機レコード認定規程」を定める。）

大正十二年は、文部省の映画事務について一つの飛躍をした年といえる。この年度には社会教育奨励費の中に、はじめて映画製作費が計上された。その時のこの事務にあたつたのは前記の社会教育課長の乗杉嘉寿、担当は中田俊造であつた。その最初の仕事として、四月、宮内省が所蔵する皇室に関する活動写真フィルムの複製頒布することから着手した。（大正十二年八月二十四日文部省告示第四百二十九号「皇室ニ関スル活動写真フィルム頒布規程」を定める。）つづいて、同年八月、「文部省製作活動写真フィルム頒布要項」（その後昭和三年に「文部省製作活動写真フィルム頒布規程」に改める。）を定めるなど、この時から現在まで、文部省映画の製作と頒布の事務は長い歴史を積みかさねてゐる。

大正十四年には、文部省は、第一回映画館書募集を行なつてゐる。その主題は、「国民の進むべき道」「青年男女の賢実な生活」「少年少女の純真な生活」など、社会教育用のものであつた。また、この十四年度には、予算の中に、「学校教育に、応用すべき活動写真フィルム製作費」を計上、学校教育用教材映画の製作に着手した。このことは現在、社会教育局に視聴覚教育課が所属して

学術・知識を注入し国民の常識を培養・発達せしむることは、従来の教育機関に一大進歩を与うる所でありまして……」とのべてゐるが、このことによつて、放送の初期における教育番組編成上の一つの指針となつたものといえる。

その教養放送は、社会教育の分野から出発し、大正の中期から昭和の初期にかけての政治的、社会的影響があつたにせよ現在まで続けられてゐる。そのころの番組の形式は、講演形式から出発し、発展して行つた。大正十三年、東京局の仮放送、第二日目、時の早稲田大学総長高田早苗の「新旧の弁」というのが、講演番組の最初として記録されてゐる。大阪局では、仮放送の開始は、大正十四年六月一日で、これもその翌日、京都帝国大学教授野上俊夫の「我國の教育」が最初のものである。放送の初期における講演放送は、政治上の論議をさけて、（注、このことは、放送事業の発足にあつて、政府は、放送番組の内容に対し、事前検閲の制度の実施、放送内容の制限、放送禁止事項の示達など、多くの通達、命令を発している。特に所轄通信局長から各放送局理事長あてに出された通達、大正十四年十二月十八日付の中で、「政治に関する講演論議の放送を禁止する」ことを指令している）、常識を養ひ、教養の向上に資するという意図のものであつた。

講座番組がはじめられたのは、東京局の「宗教講座」であつて、大正十四年五月二十四日、大谷尊由の「親鸞教の文化的意義」が最初とされている。この番組は、同年七月十九日以降は、「修養講座」と改称されて、昭和七年まで、毎週日曜日午前の時間に、倫理、道德、宗教に関する話しがとり上げられてゐる。「婦

いて、学校、社会教育の両面にわたる視聴覚教育を担当している事務内容としてらし合はせると歴史的にみて興味ある事がらといえよう。

このころ、映画の推せん・認定の審査委員は、仲木貞一、水谷竹紫であり、その事務担当は、主任中田学芸官（当時東京博物館学芸館兼任であつた）、千葉胤芳、小平不二雄、森野久四郎、松平寛義、山崎真一郎、稲田達雄、浅見和夫などであつた。このうち、松平について追記しておきたいことは、松平は、四国、高松の生まれ、大正十三年、東大美学卒、ただちに文部省に事務嘱託として入り、映画審査係となつた。

この松平は、東大の卒業論文に映画の研究をとり上げた最初の人であつたといわれている。また、松平は、大正十四年度、文部省製作映画「公衆作業東京見物」に、エキストラとして登場してゐる。なお、この映画には、仲木貞一、稲田達雄など当時の関係委員、担当係なども見られる。

このように文部省の主として社会教育における視聴覚教育行政の歩みと併行して、他の中央官庁、道府県、公共団体、宗教団体、新聞社、会社などにおいても、社会教化、職業訓練、PR用などに映画を利用することはますます活発になつてゐた。

わが国で、ラジオ放送がはじめられたのは、大正十四年三月二十二日、東京芝浦の仮放送所からの電波によるものであることはよく知られてゐる。このとき、東京放送局総裁の後藤新平は、当日のあいさつの中で放送機能の一つに「教育の社会化」をとり上げ、放送による社会教化の実現を強調し、さらに、「日日各種の

人講座」が、放送番組に現れたのは、大正十五年十一月十九日吉岡弥生が、「子女の教養に対する母の心得」と題するものである。これは、放送番組の中に「教養」の文字を見出す最初のものであつて、このころの局の番組統計表中での分類は、教育の分類ではなかつた。しかし、昭和二年十二月以後は、教養が一部門として加えられてゐる。放送局の機構についてみても、初めのころに、東京、大阪、名古屋の三局ともその職制として放送部の中に講演係、講座係あるいは児童係が配置されて、おのおの企画、実施にあたつてゐたにすぎなかつた。その後、大正十五年八月、三局の合併のあと、東京局では、教養放送は、放送部の社会教育課の所管となり、昭和九年五月、教養部と改組された。この初代部長は、そのころ、文部省社会教育局成人教育課長をしてゐた小尾範治が就任してゐる。

このころの講演および講座番組は、さきにのべた、後藤新平の開局あいさつ中の「放送機能の一つとしての教育の社会化」を実施したもので、いわゆる、知識の教養に資する内容の番組や、趣味講座、講演、さらに、料理講座、洋裁講座、子どもの時間など教育的な内容から、実利、実用の面まで広義の教養番組がその主流をなしてゐた。

教養放送は、満州事変後（昭和六年九月十八日勃発）、いよいよその分野と対象を広げていくことになつた。とくに、正式な第二放送開設（東京局は、昭和六年四月六日、大阪名古屋局は、昭和八年六月二十六日）によつて、一般向け教養講座が充実される

一方、教育的内容を盛りこんだものが活発にとり上げられ、内容、形式ともに次第にこの期間にその基礎を確立していった。

しかし、一般の講演、講座は、昭和六年以後、急傾斜で深まってきた国家主義的な国策について行かざるを得なかった。昭和七年二月十日、当時文部大臣であった鳩山一郎の「建国の精神」。徳富猪一郎の「満州新国家祝福之辞」、松岡洋右の「新興満州国」などの放送番組にその傾向がうかがえる。教養放送の基礎を確立し、いくつかの意欲的な放送を行なったのは大阪局である。それは、昭和二年二月十三日京都帝国大学医学部の真下俊一教授の医学実験放送、時事解説、日曜礼拝、日曜勤行などの宗教放送をはじめとして、わが国の社会教育放送の本格的な番組「農村への講座」などが、全国中継（昭和三年より実施）放送として実施されるまで、地方局である大阪局の試みは、注目されてよい。

これら教育番組の企画編成を積極的に指導した人は、当時奈良女高師の西本三十二教授である（後、昭和八年九月大阪局社会教育課長に就任）。昭和九年四月二日、「農村への講座」を第二放送ではじめた。もっとも、農業講座は、東京局で昭和二年四月からはじめられていたが、農村向に、団体聴取を目ざした点で、今日の社会教育番組の先駆として特記してよい。

この講座は、大阪放送局管内の府県、特に滋賀県社会教育課の協力を得て、わが国最初の系統的な内容を持ち、組織的な団体聴取を実施する計画で開られたもので、対象は、農村の青年層、テキストは無料で配布していた。

この講座は、昭和十年四月、青年学校令の公布とともに「青年

学校の時間」に吸収され、「都市青年への講座」と交互に実施されることになった。

放送の教育的利用を主として構想された第二放送の実施は、（東京局昭和五年四月六日より）もっぱら社会教育、主として成人教育と青少年向の講座などであった。また、この時、午後二時と三時四十分の放送は、小・中学校の児童生徒に対する放送が行なわれていた。これに対して、一部には、学校での放課後、団体聴取を期待する向きもあったが、それは結局困難なことであった。その理由は、放課後といっても、学校向けとしては、番組内容をもっと系統的組織的にしなければならぬし、それ以上に、文部省の積極的な協力支持が必要であったからである。この後に、昭和十二年十月午後六時二十五分から三十分間、「中等学生の間」——という番組が放送された。これも、今日の学校放送というものはなく、中等学生が、家庭で聴取し学習の補習をする目的のものであった（注、学校放送がはじめられたのは、昭和八年、大阪局から、関西二府八県の約三、八〇〇校の小中学校向の放送開始、全国向学校放送は昭和十年から）。また、義務教育を終え、中学へ進めない少年たちのために「普通学講座」が設けられていた。これは、公民、国語、数学、理科、歴史、家政、現代など中学校程度の内容のものであった。さらに、勤労青年向の職業教育としては、「実業講座」、——工業、水産業、商業、農業等の各講座が放送され、また、おのおのテキストも発行されていたが、聴取者は、当時、実業補習学校、青年訓練所などで聴取されていたが、聴取率は比較的に低かった。

しかし、昭和十年これら両者が合併して昭和十年四月一日から青年学校となったが、その前年六月、文部省は（社会教育局長河原春作）全国実業補習主事会議を開催し、実業補習教育の振興に関する協議事項の一つとして、ラジオ放送利用に関する件がとり上げている。

- 一 現在のラジオを実業補習教育に利用する方法および程度。
- 二 実業補習教育にラジオを利用した事例。
- 三 実業補習教育上放送に対する希望。

これらについて協議が行なわれたが、これは、学校放送に対しより一歩早く文部省が、社会教育面において、放送利用をとり上げた事実として、ここにあげておきたい。

放送事業の行政上の所管については、昭和初期においては、電波管理上からの通信省。著作権法および地方財政上から、ラジオ課税の関係から内務省。さらに、昭和五年十月、東京局の第二放送実施にあたって、文部省が関係するようになってきた。教育放送を目的とした、第二放送の実施計画（二重放送計画ともいわれている）が具体化されると、教育行政を主管する文部省が黙してあるはずはなかった。すなわち、放送事業を通信省と文部省の共管にしようとする主張がおこってきた。この問題について、文部省社会教育局青年教育課で原案をつくり、通信省に次のような趣旨の申し入れを行なった。

- 一 一般教育事業をおこなう法人同様、放送協会を文部省監督下に取り締まる必要がある。（注 当時放送協会は、民法による社団法人であった。）

- 二 放送内容は、文部省が検閲する必要がある。

- 三 教育放送に関する規定を制定する必要がある。

- 四 二重放送における放送内容の処理方針は、どのようなものか。

- 五 放送内容に関しては政府部内の協議機関を設ける考えはどうか。

この質問に対し、通信省側では、二重放送は、単に教育手段とみる考え方に強く反対した。そこで、昭和五年十二月初めに、関屋龍吉文部省社会教育局長は、通信省電務局長畠山敏行を訪れ、次のような文部省側の申し出を行なった。

- 一 教育放送をおこなう以上、教育事項を主管する文部省の監督を受けるのは当然である。

- 二 したがって、現行定款が不十分ならば改正すべきである。

- 三 文部省は、人員設備の不足で実際の監督には当たれなくとも、文部大臣が通信大臣とともに監督できるような筋道を立てるべきである。

これに対して、通信省側は次のような見解をのべている。

- 一 放送は国民生活各般に効果を与えるもので、単に教育的効果だけに限定できない。

- 二 たとえ放送事業は教育を行うものであるとしても、その手段または設備である無線電話の運用監督が通信者の所管であつてすこしもさしつかえない（教育的出版、集合が内務省所管であると同様である）。

- 三 放送内容において教養事項が増加しても放送事業の発達に

ともなう当然の結果であって、設立目的で事業が変化したのではないから、日本放送協会の定款の設立目的に關する条項を変更する必要はない。

四 協会はすでに民法の規定によって適法に成立存続しているから、さらに主務官庁を加えて、民法の規定によって補足を必要とするほどの欠陥は認められない。

五 文部省が實際上放送事業の監督に当れないことを自認している以上、同省の監督下に置くことは無意味である。

このような回答であつたので、問題はさらに上司に引きつがれ、同年十二月二十日、当時の文部次官中川建蔵が、通信次官今井田清徳を訪れ意見をのべたが一致をみず、問題はさらに、文部政務次官野村嘉六と通信政務次官中村啓二郎との政治折衝までにいたつた。

そして昭和六年一月二十二日次のような了解が成立している。

一 法規上の見解、日本放送協会は放送事業の経営を目的とする法人であるから、監督官庁の主管は、その事業自体によって決定されるべきである。また、放送内容は社会各般の事項を含んでいる。したがって、その中の教育事項があるからというので、ただちに放送事業が文部省の監督下に入るべきものだということはできない。

二 実際上の見解、放送事業は敏速を必要とするから、政府の二重、三重の監督は望ましくない。

三 通信省としては協会の監督のためにすでに相当な施設を持ち、政府内部の關係各省との連絡も十分おこなうよう留意している。文部省との間も、同省側が適当な人物を指定し、通信省

の事務主任者との間に平素から緊密な連絡をとらせるなどの方法を講ずる。

このようにして、放送事業における教育行政の監督権の問題は一応解決をみたわけである。

しかし、放送事業における教育放送に關する所管については、昭和二十五年四月二十六日制定の放送法。昭和三十四年三月二十三日公布の放送法の一部改正。さらに昭和四十一年三月、国会に提出された「放送法の一部を改正する法律案」などいずれの場合においてもその法案作成の段階、ならびに国会での審議に際しても、その事ならには多少な相違こそあれ、この問題がまったく解消してしまつたとはいひ得ない。この三十五年前の事実をふりかえてみるといまさらながら、古い言葉ではあるが、「歴史はくりかえされる」ものらしい。

以上は、視聴覚教育の歩みの中から、今日の視聴覚教育の当面している課題のうちのいくつかに焦点を合わせながら、過去の資料を羅列したにすぎない。

臨戦体制下、大正初期から映画についての諸問題が一応解決されといわれる映画法の制定。つづいて第二次大戦中における視聴覚媒体の利用状況。そして、終戦後、占領政策の一環として、成人のけいもうと民主化を促進しようとしたCIE映画計画、講和条約締結後の社会教育における視聴覚教育の位置づけという自主性のある歩みの中にある種々の重要な問題などそして、それを指導し推進した人びとのことを述べなければならない。しかし、このたびは限られた紙数もきたのでかく筆することにする。

(社会教育局視聴覚教育課専門員)

編集後記

★本号は、「教育計画」を特集としました。教育計画についてはすでに数年前、所得倍増計画を中心とした社会経済発展計画がたてられた際、それとの関連において教育の総合的、長期的な計画というところが大きな問題となりました。本誌でもそれについて、昭和三十九年一月号で「長期教育計画の視点」と題する座談会を行ない、所得倍増計画と教育計画、教育計画の基本的な考え方、経済活動と教育目的などについて、問題の所在を明らかにしました。

この教育計画は現段階において、どのような意義と必要性をもつものであるかを、長期計画、総合計画、社会経済計画との関連という観点から、天城大学学術局長に論じていただきました。ここで

は、「教育計画の内容は、国の将来の社会経済の発展を見通して、そこにおけるあるいはそこに至る教育活動全体に対する社会的および個人的需要をいかに効果的に満たすかという長期的な総合的なそれゆえに主として中央政府レベルにおける教育計画である」と定義され、その理論的、実践的課題が周とうに検討されています。

★地方レベルにおける教育計画としては、ほとんどの都道府県が長期総合計画の一環としての長期教育計画をもっており、ここではとくに神奈川県の場合をとり上げ、一事例としました。

★外国の教育計画についてはOECD、ユネスコの紹介、アジア諸国の計画などをとりあげました。

ME J 9477

文部時報 八月号

第一〇六八号

昭和四十一年八月五日 印刷  
昭和四十一年八月十日 発行

著作権  
所有 文 部 省

発行者 株式会社 帝国地方行政学会

小川平二

東京都立川市曙町三の五五

印刷所 株式会社 行政学会印刷所

東京都新宿区西五軒町五二

営業所 株式会社 帝国地方行政学会 館別

電話 (268) 二二四二(代)

振替口座 東京二〇、〇〇〇番

購 読 料

定価 一冊 七十円  
送料 〃 六円  
一か年 八百四十円

(前納の場合は送料不要)

ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し上げます。なお購読の申し込みは、直接発行所またはよりの書店に願います。



# 文部時報

第 1071 号

昭和41年 11 月

## 幼児の成長と学習

※児童心理学の立場から 山下 俊郎 2

※脳生理学の立場から 時実 利彦 7

## 座談会

「幼児教育の諸問題」 ..... 12

(出席者)河野重男・高杉自子・津守真・宮下俊彦

・西田亀久夫(司会)多田鉄雄

幼稚園・保育所・小学校 坂元彦太郎 37

幼稚園教員養成の諸問題 安養寺重夫 44

幼稚園教育の現状をめぐって

——振興施策の観点から—— 大谷内 亨 49

わが国就学前教育の沿革 小川 正通 55

高等学校教員資格試験について

——その受験状況と試験問題—— 教職員養成課 61

教育用語「中学校卒業程度認定」とは 西崎 清久 42

## 連載第八回

人物を中心とした社会教育史

芸術文化を育てた人びと 福田 安男 84

文部省重要通達一覧 ..... 95



表紙 安部照子 カット 須貝夫早子

## △ 著作権法改正案の検討を依頼

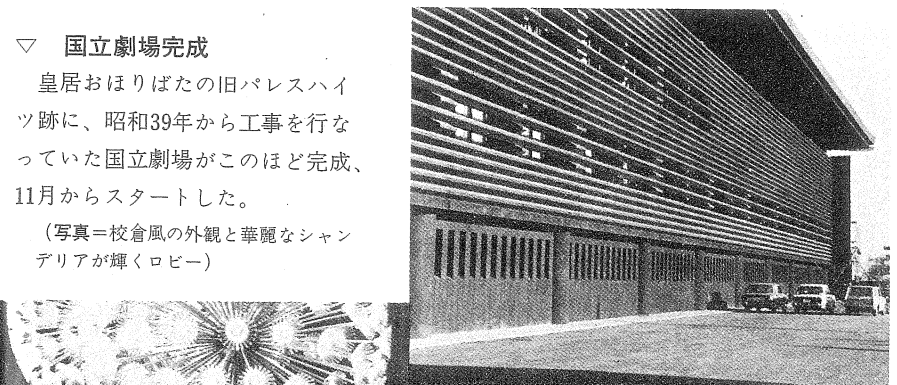
さる4月20日著作権制度審議会は文部大臣に対し著作権法の改正について答申を行なった。文部省はこれに基づいて「著作権および隣接権に関する法律案」(文化局試案)を作成、10月22日に開かれた同審議会にその検討を依頼するとともに、一般にも公表した。

(写真=10月22日開かれた著作権制度審議会とあいさつをする中川善之助新会長)

## ▽ 国立劇場完成

皇居おほりばたの旧パレスハイツ跡に、昭和39年から工事を行っていた国立劇場がこのほど完成、11月からスタートした。

(写真=校倉風の外観と華麗なシャンデリアが輝くロビー)



# 人物を中心とした 社会教育史

福田 安男



## 芸術文化を育てた人びと

はじめに

一国の芸術文化を興隆せしめた人びとが問われるならば、真先に多くの芸術の天才・巨匠たちの名まえがあげられねばならないだろう。芸術文化を向上せしめる主役は芸術家自身にほかならぬからである。次には、みずからは芸術活動を行なわずとも、芸術を理解し、その将来をうらない、国民に向かって芸術の意義を説き、その享受をすすめた人びと——簡略に言えば芸術文化の向上普及に側面から貢献した人びと——として、多くの思想家、評論家、政治家、行政官、教師、ジャーナリスト、それにいわゆる芸術パトロンたちの名をあげべきであろう。

とりわけこの連載の趣旨からすれば、すでに歴史の上に脚光をあびた人びとのそれよりそうでなかった人びとを、あるいは地方にあってひそかに一隅を照らした人びとを探り上げることに本旨があろう。その業績にふさわしい墓碑銘のきざまれている人はいない人は多いはずである。

しかし右のような意図をもって明治以降の芸術文化の歩みをあつづけることは、実は容易ではないことである。というより、どの芸術分野について考えてみても、これはむしろ将来専門家の分

な、作家とちがって残すべき作品を持たぬ行政官の苦勞というものは、逆に、余りにも知られなさすぎるからである。

担作業に待つべき未開拓の分野であると言うのが正しい。したがってこの稿は、門外漢である筆者がたまたま読むことを得た幾冊かの書物の紹介——それもきわめて不得要領な——で責をふさぐことにした。なお、限られた紙幅の中ではあっても、できるだけ多くの人を紹介し、しかも無味乾燥にならぬような記述を心がけるべきは当然であったが、この注文に答えることは筆者の能力が許さなかったことをおわびしておく。

### 一 明治大正の美術界と正木直彦

まず美術の分野における正木直彦という明治・大正から昭和初期に至る美術界とともに歩んだ、ひとりの卓越した行政官のことを書いてみたい。

正木直彦については日本美術辞典（東京堂刊）に「文久二年（昭和十五年）（一八六二—一九四〇）、号は十三松堂、堺の人で明治二十五年に東京帝国大学法科を卒業し、同三十四年から昭和七年まで東京美術学校長、辞して帝國美術院長となる。現代美術の棟梁として、現代美術の發達に尽した。」とある。正直に言って筆者は正木直彦の業績がわが国近代美術の發達の上で一般にどう評価されているのかを知らず、また別に彼を扱った研究・評伝のたぐいがあることを聞かない。しかしここで彼を紹介してみようと思うのはまさにそのためである。岡倉天心や黒田清輝の業績について、おそらく右の正木直彦に関するものに数十倍する文字が、今後とも繰り返しいやされよう。しかし正木直彦のよう

な、作家とちがって残すべき作品を持たぬ行政官の苦勞というものは、逆に、余りにも知られなさすぎるからである。

＊ ＊ ＊

正木直彦は、文久二年十月和泉国堺夕榮町に直木林作の三男として生まれた。母の実家が天和であった関係で、こどものころよく母につれられて奈良に回ったという。回顧録には当時の排仏棄積の風潮と堺や奈良で多くの古美術が放置され荒廢してゆくさまがよくとらえられており、また本人自身十歳ごろから古い絵巻物や掛軸に異常な関心を持ったことが語られている。この生来の美術への関心は二十年後に彼の一生の業と結びつくことになった。明治十四年に大阪府立堺中学校を卒業、熊野小学校訓導となり、同年のうちに二十歳で首席（今の校長）になった。しかし翌

十五年には辞任し、十六年に上京、十七年に成蹊学舎、同人社共立学校を経て、九月大学予備門にはいった。もともと「工業によって身を立てよう」と志し「た彼は、「工部大学校へ入って化学をやろう」と考えた」からである。大学にはいる準備のため共立学校で勉強したところ、同じ仲間には山座円次郎、床次竹二郎、福原鑑太郎、水野鍊太郎等がいた。うち福原は後日正木直彦の役人生活生活の大部分で彼を庇護するいわば兄貴分の役割をになうことになった人物である。大学予備門（のち第一高等学校と改称）は二十二年に卒業したが、同期生に夏目漱石、正岡子規、山田美妙斎、南方熊楠、白浜徹（図画教育者）などがいた。

この時代の挿話(そうわ)の一つに博物館をめぐる古沢知事と帝室博物館総長九鬼隆一との衝突がある。(挿話にスペースをさくのは惜しい気もするが、この話はいかにも明治的で、かつユーモラスでさええ

は一万円で、右のプランに付屬工場を設けると、どうしても二万円が不足である。福原と正木が古沢知事に相談すると知事は「この円は妙案ぢや」とばかり賛成し、間もなく來県した土方宮内大臣に「さうでその了承も得られ宮内省に稟

付されたのである。九鬼総長は「こりゃけしからん。我輩をさ  
しおいて直接宮内省に願を出すとは越権である。さらに、本計  
画そのものも総長として不同意である！」というわけで、書類を  
奈良に差戻して来た。そうすると今度は古沢知事の方が烈火の如  
く怒った。「それ位の秩序がなんだ。九鬼の手で出来そうにもない  
ことを吾々の努力で内諾を受けるに至ったのだから、本来なら良  
くやってくれたと喜ぶべきである。しかるに些々たる感情から事  
を誤るなどとは実にけしからん。よし、それなれば、当方も九鬼  
に一泡吹かせてやる！」とばかりに、いきなり三人の辞表をとり  
まとめて、宮内省に送ってしまった。驚いたのは宮内省で、「金  
の請求書が出るかと思つたら辞表が出るとは何事か？」と照会し  
てくる始末である。さて古沢知事は直ちに県下の神官僧侶を集め  
て博物館長を辞したことを告げるとともに、県知事としては許可  
なしに宝物の移動を厳に禁止する旨を言い渡した。博物館の建物  
はでき上がったが館長も主事も不在では開館できない。九鬼総長  
はみずから奈良に赴き躍起になって社寺側に出陳を掛合つた。こ

一応のあいさつもせず急いで帰京してしまつた。皮肉なことに、同年六月正木は文部省入りをし、奈良からの土地献納願に接して事の真相を知った。そもそも奈良に美術学校の分校をつくる話は専門学務局長すら聞いたことがなく、岡倉天心一流の独断専行であつたことが判つたのである。

右の一件では正木真彦が岡倉天心にいい印象を持ち得なかつたろうことは想像にかたくない。しかし正木ほどの人物が天心の天才・性行を冷静にとらえぬはずもない。「閑話録」の中の「文展二十五年」という随想は美術学校の創立時のことに触れ、天心について次のように語っている。「教授科目については異論もあつたが、岡倉氏は、絵画と漆工、金工、鋳造とを同列におくという破天荒の大英断を行つたので、今まで奨工社などで働き職人扱いされてゐた工芸方面の優秀な技術家が一躍美術学校教授、高等官に任命され、その結果工芸方面の技術家にも非常な自覚を促し、技術の向上をもたらすに至つた。時期尚早の非難を押し切つてこれを断行した所に岡倉さんの偉い所がある。」と、天心の偉大を誤たず指摘している。思うに天心という人物にとって右の程度のことでは当然すぎるほど当然のことであつたに相違なく、むしろその事に一端をみる彼本来の構想力の豊富さ、直感の鋭さが、彼をして明治美術界の巨大な牽引車たらしめたのである。

健全な常識人としての正木はまた天心の性格については次のように述べる。「だが、美術の熱愛者にありがちな傾きの激しい人で一つの事に熱中するとその他の事は忘れてしまふというふうな事

があり、そのために不平をいう人が出て来た。」また、「岡倉前校長は天才肌の人であつた。それだけに、物に対して好悪があり、好きなものに對しては大いに力を入れるが、嫌いなものは見向きもせぬ。だから好きな人を引立てる為には、嫌いな人が犠牲になることを免れなかつた。岡倉君に言わせれば、美術などというのは多数の凡庸は犠牲にしても、少数の天才が生かされればそれでよい、というのであつた。しかしこれは天才教育家の天才教育法であつて、一般的には融和を欠き、動搖の原因となる。要するに天心は不羈奔放な、恣意のまま生きた、詩人であり、「偉大なロマンティスト」(河上徹太郎)であつた。そうして資質・性情においてその正反對の人が正木直彦であつたと言えよう。彼は、フエノロサが理念を与え岡倉寛三が奔放な言動で触発し方向づけたわが国近代美術の進路の、その土台を着実に固めるという役割をになつたのである。

彼が明治三十六年六月「突然」文部大臣秘書官に任命されたことはすでに述べた。事の次第は都築文部次官が古沢知事から話を聞き、福原を鳥取への赴任途上で文部省参事官に引取つたのであり、さらに福原から正木が「奈良で孤立無援の立場に置かれてゐる」由を聞かされ、文相に秘書官として推薦したのである。

彼の秘書官生活は約二年半で、その間に前後七人の文相を送迎しているが、うち大隈内閣時代は文相尾崎行雄、次官柏田盛文、専門学務局長高田早苗という顔触れで、大隈と高田は旧知であつた。高田とは「どうせ内閣というものは永く続くものではない。

余にわたる欧米出張を命ぜられる次第となつた。

翌三十三年彼はパリで博覧会のために出張した岡田良平と教育行政研究で来た福原と落ち合い、パリ万国博覧会の視察を終わつたのち、三人連れ立つて欧州各地を歩き回つてゐるが、その間の事の一つにウィーン公使牧野伸顯とのめぐり合いがある。またウィーン訪問で会つた牧野伯は美術愛好家であり、かつ欧州各々の美術施設に精通している。しかも三人が文部省の役人であることから、しきりに「日本でも文部省あたりで美術奨励法を講ずべきである」と力説し、その手段として「ぜひ、フランスのサロンのごときものを文部省が主催すべきである」と言う。三人は共に鳴し実現に努力することを約したことは言うまでもない。こうした因縁が後日の文展開設を生むことになつたのである。

翌三十四年帰国すると六月に桂内閣が成立し、菊池大麓が文相となり、岡田良平は次官を、彼は「美術学校がゴタゴタしているから行つてくれ」と美術学校校長を命ぜられた。

東京美術学校は明治二十三年の開校以来岡倉天心を中核とする進歩的国粹派の牙城であつたが、洋画界の成長に押されて二十九年には西洋画科の設置を見、教授黒田清輝を中心とする白馬会が勢力を伸ばす一方、「日本美術協会」(保守的国粹派)と「明治美術会」(小山正太郎等を中心とする洋画団体)を敵に回す状況になつてゐた。そして三十一年、天心は彼を中傷する怪文書的一件が導火線となつて排斥運動が表面化し、ついに退陣を余儀なくされた。その間、天心派の橋本雅邦、下村観山、寺崎広業、菱田春

それだけになんぞ後々にまで残るような事をしておこう。」と話し合う間柄で、文芸復興を考える高田早苗が「日本には国立劇場がないから今のうちに文部省の手でこれを作りたい。」と言へば、正木直彦は「博物館、美術館というものを大いに興し、一方ではフランスの制度のごとく、文部省というものを教育美術省としたい。すくなくとも文部省の中に美術局というふうなものを造り、科学と美術と芸術との綜合發達を図りたい。」と言うわけで、二人は大隈総理に熱心に説いた。「軍艦を造るには一隻でもつて千二百五十万円いります。せめてこの金の利子だけでも文部省に廻し、それを経常費の上に付加えてください。そうすれば、われわれの考へてゐるような事は苦もなく実現されるのです。大隈内閣の時代以後世にまで影響を及ぼすような文化的な事業をぜひ一つの時代に残してしまふのがよいでしょう。」そのころは一般官吏は毎月俸給の中から製艦費として一割ずつ拠出させられ、その年額二千五百万円で軍艦二隻を造つた時代である。列国からは日本は軍備拡張に努めてゐると見られ、外国の評判は悪かつた。大隈総理は賛意を表したが、ちょうど予算編成期の前で経費の伴う事業は次年度に待たねばならなかつた。「しかし、せめて金のいらぬ事だけでもやろう」というわけで、大臣官房に美術課が置かれ、正木直彦は文書課長兼美術課長となつた。しかし同十一月に大隈内閣は瓦解して山県内閣となり、二人が作つて提出しておいた予算は削減され、わずかに外国の美術館視察費だけが残された。そうしてこの計画の「発頭人である」彼が三十二年十一月から一年



草、横山大観等の辞表提出、文部当局の慰留工作、強硬派（大観等六名）の免官処分、荒木寛畝、大村西崖等保守派の任命、明治美術会より浅井忠の就任等々があつて美術学校の内部は動揺に動揺を続けた。美校のゴタゴタとはこれをさすのであつて、天心の校長退任後、東京女子高等師範学校校長高嶺秀夫が校長事務を兼ね、ついで久保田鼎が就任して学校騒動の始末に追われていたのである。

かくて正木直彦は美校四代目の校長、実質的な意味では二代目の校長となつた。その在任は昭和七年三月三十一日まで実に三十九年の久しきに及び、この間着々と学校整備に見えざる行政手腕をふるつた。創業の人を岡倉天心とすれば、すぐれた守成の人は正木直彦であると言えよう。天威の芸術行政官ともいふべき彼には、何よりも美術への愛、それから美術家という特殊な人種に対する理解、芸術界に対するに必要な公平さ、包容力、理知的な判断、明快な実践力といった、それにふさわしい資質が備わつていたと思われるのである。

彼は校長になるとさうそく天心と相談して日本美術院から下村観山、寺崎広業、小堀軻吉という俊英を教授に迎えて日本画科の充実を図つたが、ここにも彼の冷静な判断を見ることが出来る。彼は日本画の将来を進歩的国粹派の方向に期待してゐたのである。彼はまた教授法に関しては岡倉天心とは正反對に各人の教育法に干渉せず、各人各様の独得の教授法にゆだねてすこしも不安を感じなかつた。校長としてはもっぱら「先生たちの授業の便宜

が、さらに牧野伯と親しい九鬼隆一がかねていっていた美術行政機関の設置を牧野文相に説けば、東京帝国大学教授大塚保治は浜尾新（帝大総長）、高嶺秀夫、柳沢政太郎（文部次官）、福原謙二郎、松井直吉（理博）、塚本靖（工博）、中沢岩太（工博）等の賛成を得て官展開設建議案を出すというように、文展開設に踏み切る条件は熟していた。そうした状況の中で正木と福原のコンビは、西園寺首相と親しい黒田清輝をも加えて、直接文相に対し文展の実現を説いた。文相に異存なく首相もまた芸術の良き理解者であつたから、朝野の賛同を得て事は円満に発足したのである。

正木と福原の起草になる「美術審査委員会官制」（明治四十年勅令第二〇号）と「美術展覧会規程」（文部省告示第一七二号）が制定されたのは明治四十年六月六日である。そうしてこれに基づき第一回文展が上野において全国民の熱烈な期待と注目をあつめて開催されたのは十月二十五日から十一月二十日までであつた。委員長は柳沢文部次官、主事は正木直彦である。

ところで第一回文展の最初の難関は審査員の選定であつた。文相は官制の制定をみた六月中旬に美術家を官邸に招待してこの問題に関する意見を聴取し、さらに七月に第二回、第三回を開くなど慎重を期したのであるが、審査員の候補者の名が一部新聞に漏れるや美術界はにわかに騒然となつた。その前に日本画では、美術学校騒動後在野の旗を掲げた日本美術院の作家たちをどうするかという問題があつた。日本画の高峰である橋本雅邦を除外したくないとするのは関係者の一致した意見であつたが、雅邦は天心

になる参考の図書とか標本とか美術品とかいうようなものの蒐集に全力を傾けたのである。ついでながらこの校長は逸品を見つける名人でもあつた。町の骨董屋でこれはと思うものに出会うと即座に美校用に買い取ってしまうのであるが、それらの中には後に国宝に指定されたものもあつた。（彼の古美術品に関する深い学識や鑑識力、また茶人としての一面は「閑話録」で知ることが出来る。その名作蒐集の思い出話には得意気な口吻すら感ぜられる。）

さて、明治三十九年には西園寺内閣が成立し、帰朝を命ぜられた牧野伸顯伯には文相のいすが待っていた。美術学校長正木と専門学務局長福原とが年来の構想を実行にうつす時機が来たのである。

これよりさき明治三十年代の美術界は小会派が乱立して混乱と紛糾の様相を呈し、識者の間には美術界の大同団結を望む声が起こつてゐた。一方、明治三十三年すでに高村光雲、川端玉章等の帝室技芸員による建議（美術全般を統轄する官庁の設置、美術審議機関の設置、表彰制度の制定、美術大学の設置、美術資料の収集、団体への補助等を内容とするもの）（三十三年には小山正太郎、高村光雲等を発起人とする美術家の懇談会「美術同志会」の請願（美術館の設置、美術高等会議の設置、美術家の海外派遣、美術団体への補助等を内容としたもの）があつたことで知られるように、美術の保護奨励を求める運動はようやく盛んとなつてきた。すなわち一大美術展を待望する世論は次第に盛上つてきたのである。

と行動をともしている所に難点があつた。交渉の結果は果たせるかな雅邦は天心もともに入れることを条件にし、天心に交渉すると大観と観山をも採ることを条件にした。この件は結局、天心、雅邦、大観、観山の四人を採ることで解決したかに見えた。しかし事實はこれが発端となつて、下条正雄等主として日本美術協会や日本画会に拠る人たちが、すなわち「旧派」の面々は、「この協会は『新派』にかたよつていて真に国粹の正しい絵画を奨励する道ではない」と騒ぎ出し、全国の美術団体に機をとばし反文展運動の団体「正派同志会」を結成、文展期間中別に展覧会を開催するの拳に出た。前記の両三度にわたる懇談会の席上でも、審査員の人選に関する各人各様の不満が爆発し、議論百出のあげくは正木主事に対する個人攻撃すら行なわれるほどのものであつた。

いろいろの曲折を経て八月十三日に第一回文展の審査員が発表されたが、その顔ぶれは次のとおりであつた。

第一部 日本画（主任）\*中沢岩太、\*松井直吉、\*大塚保治、\*塚本靖、\*高嶺秀夫、\*岡倉天心、川端玉章、荒木寛畝、\*今泉雄作、\*藤岡作太郎、橋本雅邦、寺崎広業、下村観山、菊地芳文、竹内栖鳳、野口小蘗、今尾景年、川合玉堂、横山大観、山元春挙、松本楓湖、小堀軻吉

第二部 西洋画（主任）\*松井直吉、\*中沢岩太、\*森林太郎、黒田清輝、\*岩村透、浅井忠、松岡寿、\*久米桂一郎、岡田三郎助、和田英作、中村不折、小山正太郎、満谷国四郎



民の美術に対する関心を高める上に大きく貢献したこと、さらにその舞台裏では正木直彦のような良識の行政家が必死にカジをとり続けて来たことを言いたいたためである。

正木直彦についてはなお語るべきことが多く残されている。たとえば工芸に寄せた理解の深さ、同時にその発達に尽した業績、幾多の俊秀を発見したその伯樂ぶり、健康なその芸術観等々——これらに触れないのは片手落ちであるが今は割愛する。

彼は昭和六年、森鷗外、黒田清輝、福原錦二郎に次ぐ四代目の帝国美術院長となり、昭和十年の松田改組の際辞任した。没年は昭和十五年三月二日である。

参考文献——浦崎永錫「日本近代美術発達史・明治篇」（昭三六）、森口多里「美術八十年史」（昭二九）、河北倫明編「近代日本の美術」（昭三九）、小倉・永井・西沢「日本近代美術の歩み」（昭三九）、その他。

（文化局芸術課課長補佐）

（文化局芸術課課長補佐）

\*

\*

\*

\*

\*

\*

である。この審査員任命をみると前年正派同志会の動きに反発して新派の青年作家たちが結成した同盟団体「国画玉成会」（尾竹竹坡、島田墨仙、安田靉彦、今村紫紅、小山栄遠、鍋木清方、菱田春草等）は黙っているはずもなく、猛然文部省の路線変更の非を鳴らして文展不出品を決議し、別個に美術展を持つことで対抗し、岡倉天心、横山大観、下村観山また審査員の辞任を申出（但し、これは岡田良平次官がにぎりつぶした）、紛乱の第二回文展はすこぶる後味のわるいものとなった。第三回文展はこれに反し文部当局、とくに岡田次官、福原専門学務局長、日本画主任松井直吉の努力がみのって国画玉成会も復帰し、表面的にせよ政治闘争は影をひそめ、日本画、洋画、彫刻の各部門とも完全に全美術界が顔をそろえ、作品にも秀作が多くて盛観を呈した。（正木はこの年と翌年は日英博覧会の責任者として忙殺されていた）この第三回、第四回あたりからとみに青年作家の進出や新鮮な作風のたい頭がみられ、その後の美術興隆を予感させるものがあった。

すでに紙数も尽きたのでこの後の文展・帝展の審査にまつわる動きについては割愛せざるを得ないが、初期文展における各派の相こくについて少しく触れる所があったのは、芸術闘争はそれが純粹な形で熾烈に行なわれるとき芸術の興隆をもたらし、それが手段をえらばぬ政治的色彩を帯びたものに堕するとき停滞をもたらすものであるという教訓を読むからである。そうして文展という制度が過去においていろいろの欠陥や矛盾を露呈しつつも、大局的にはわが国の美術文化の振興に役だって来たこと、とくに国

\*

\*

\*

\*

\*

# 編集後記

★今年は就学前教育発足九十周年にあたり、十一月十五日に盛大な式典が教育会館で行なわれます。

本誌では昨年五月号すでに「就学前教育」の特集を行ないましたが、上のような事情もあり、再度「就学前教育」を特集としました。

なお、本号の編集にあたっては前回の特集との重複を避けるよう留意しました。

幼稚園教育については、昭和三十九年度から「幼稚園拡充整備七か年計画」が進められており、これによれば、昭和四十五年までの間におよそ三、六〇〇園を新設、一、〇〇〇学級を増設することが予定されています。おそらくこの目標が達成されたならば、日本の

学校教育全体の上に大きな影響があらわれるものと思われまふ。

★本号においても、「幼児教育の諸問題」と題して座談会を行ないました。ここでは幼児教育の現状、その問題点などが中心としてとり上げられています。司会はず年五月の座談会の際と同じく、一橋大学の多田先生にお願いし、幼児教育を専門に担当しておられるお茶の水女子大学の津守真、東京都指導主事の高杉自子、全社協保育制度研究会委員長宮下俊彦の諸先生をおまねきし、またそのほかお茶の水女子大学の河野重男先生と、本誌の編集委員長である西田審議官に加わっていただきました。

MJE9480

## 文部時報 十一月号

第一〇七一号

昭和四十一年十一月五日 印刷  
昭和四十一年十一月十日 発行

著作権 所有 文 部 省

発行者 株式会社 帝国地方行政学会

小川平二

東京都立川市曙町三の五五

印刷所 株式会社 行政学会 印刷所

東京都新宿区西五軒町五二

営業所 株式会社 帝国地方行政学会 館別

電話 (268) 二二四一代

振替口座 東京一〇、〇〇〇番

購 読 料		
定価	一冊	七十円
送料	〃	六円
一か年	(前納の場合は送料不要)	
	八百四十円	
ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申しあげます。なお購読の申し込みは、直接発行所またはよりの書店にお願いします。		

# 文部時報

第 1073 号

昭和41年 12 月

学力とその評価	橋本 重治	2
小・中学校児童・生徒の学力		
——各年度の学力調査の結果を中心として——		
小学校 算数	中島 健三	11
中学校 数学	大野清四郎	17
小学校 国語	藤原 宏	21
中学校 国語	渋谷 宗光	25
小学校 社会	小林 信郎	29
中学校 社会	神原 康男	33
小学校 理科	平田 嘉三	38
中学校 理科	蛭谷 米司	43
小学校 音楽	関 利一郎	48
中学校 技術・家庭	大塚 誠造	51
中学校 英語	真篠 将	54
鈴木 寿雄		
安戸 良平		
家庭における教育費の比重	大臣官房調査課	62
〔所轄機関紹介②〕		
「統計数理研究所」	島田 武彦	71
連載第九回		
人物を中心とした社会教育史	駒田 錦一	77
「文部時報」昭和41年度年間目次一覧		87
文部省の会議・行事等から		58
文部省重要通達一覧		95

表紙 安部照子 カット 須貝夫早子



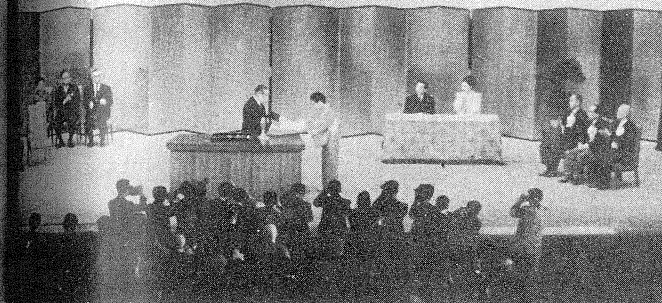
## ▶新文相に

剣木亨弘氏

12月3日佐藤内閣の改造により、新文部大臣には参議院議員剣木亨弘氏が就任した。剣木新文相は文部省大学学術局長、文部事務次官を歴任した文教行政のベテランで、その手腕が期待されている。〈写真は事務引き継ぎを受ける新文相④〉



## 幼稚園教育90年記念式典



### ◀幼稚園教育

90年式典举行

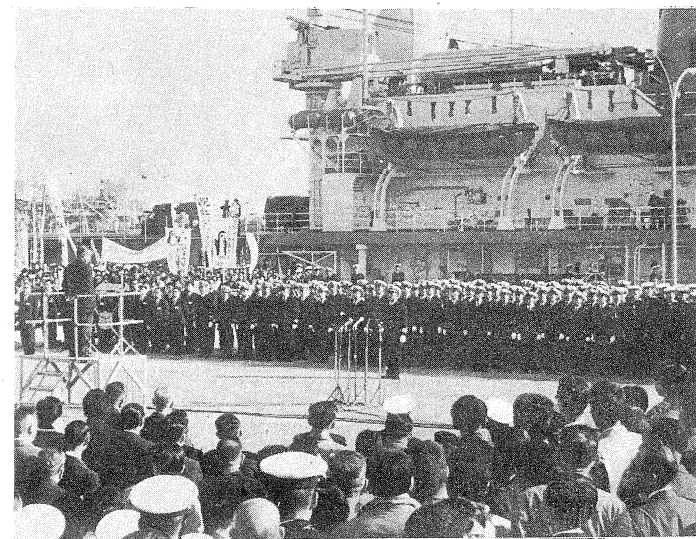
わが国が幼稚園教育を始めてから90年。それを記念した式典が、皇太子・同妃両殿下をお迎えして11月15日国立教育会館で举行された。式典では462人の幼稚園教育功労者が大臣から表彰された。

〈写真は式典での教育功労者表彰の一コマ〉

## ▶観測船「ふじ」

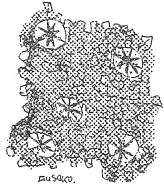
南極へ向かう

南極観測船「ふじ」は、第8次南極観測隊40名と乗組員182名を乗せ、12月1日初冬の風が冷たい東京港晴海ふ頭から南極へ向かって出航した。総行程は22,000浬、オレンジエローの船体が再び東京港へ帰るのは来年4月19日の予定。〈写真は晴海ふ頭で「ふじ」を背にしての出港式〉



人物を中心とした

## 社会教育史



駒田 錦一

### 社会教育行政を育てた人びと（その一）

#### 一 はじめに

わが国の「社会教育行政を育てた人びと」の列伝を記するに当たって、どの時代までさかのぼるべきかについては、いろいろ議論もあろう。しかし近代的な公教育としての社会教育ないし通信教育は、明治四年七月に文部省が創設されると聞もなく同年九月に省内に設けられた「博物局」、翌年二月にこれが改称された「博物館」と、また明治五年四月文部省内に設けられた「書籍館」後の「図書館」にその端緒を見ることができ、その意味においては明治四年七月から六年四月まで文部卿の職にあり、文部省の発足当時から「学制」とならんで社会教育を教育振興の重要施策として確立した大木喬任の名があげられるであろう。また明治十二年に公布された教育令は、あらゆる教育機関に関する基本的な条項を確定しようとする方針のもとに起草されたものであるが、その条文の第一条には、書籍館の名称が掲げられ、幼稚園、学校と並べて、書籍館は公・私立の別なく、みな文部卿の監督下にあるべきことが定められている。この規程は図書館の名称が教育に関する条文のなかに掲げられた最初のものであり、また図書館を教育制度の一部として取り扱う方針を明確にしたもので、文部省が学校教育のほか、社会教育施設をあわせもとうとした意



図を明瞭に示すものであるが、この法令の立案の中心となった人は田中不二麻呂であった。もともと明治四年以来の博物館や図書館の施設を推進したのは、海外の事情ことにアメリカの教育状況を視察し、諸外国の社会教育施設に深い関心を寄せた田中の構想によるものであったし、十二年の教育令の制定当時彼は文部大輔省務撰行の地位にあったから、立案者としてもまた執行の責任者としても、彼の役割は大きく、社会教育行政を育てた人びとの列伝からはずすことはできない。

また「通俗教育」という言葉が法令の上にあらわれるのは明治十九年に制定された文部省官制であって、その第十条に学務局があげられ、「第三課ニ於テハ師範学校・小学校及通俗教育ニ関スル事務ヲ掌ル」とあり、翌二十年には「図書館博物館及教育会通俗教育ニ関スル事務ヲ分掌セシム」となって、普通学務局の事務を明らかに、その行政責任を明確にしているから、その当時十八年十二月から二十二年二月まで文部大臣の職にあった森有礼の名も見のがすことはできないであろう。

図書館は教育会の廃止後、明治二十三年十月小学校令が改正された際、小学校令のなかに規定され、設置廃止その他については小学校令の条項が適用されることになったが、これは図書館がしだいに制度化して適用される方向をとったことを示すものといえよう。しかし図書館の設置運営は学校とはいちじるしく異なるので、これを別個の法令によって規定することが必要となり、明治三十二年十一月図書館を学校から分離して独立の規程をもって統

轄するために「図書館令」が公布された。ここにはじめて社会教育施設が独立の制度として確立され、社会教育行政は新段階にはいることになった。当時文部行政の責任の地位にあったのは樺山資紀であった。図書館はその後しだいに整備の度をはやめていったが、明治三十九年十二月の「図書館ニ関スル規程」、同四十三年六月の「図書館令施行規則」の公布によって、いよいよ制度の充実が図られることになった。前者は牧野伸顕、後者は後に述べる小松原英太郎が文相の職にあったときであった。また明治三十八年十月久保田譲文相に対し、地方青年団体の改善指導に關し通俗教育委員より建議があったことは青年団体に對する文部省の関心を高め、その結果これに對し「適宜指導ヲ加フルニ於テハ容易ニ通俗教育上著大ノ効果ヲ收メ得ベキ儀」として、文部省普通学務局長通牒「青年団体ニ関スル件」が発せられたのは三十八年十一月のことであり、戦時中各所において行なわれた通俗講演会、幻燈会等「教育上多大ノ利益ヲ与ヘタルコトヲ認メラレタ」施設を継続し拡張普及せしめる趣旨の通牒が出されたのは三十九年三月のことであるが、前者は桂太郎総理大臣文相兼撰時代であり、後者は牧野伸顕の文相時代であった。当時これを助けたのは普通学務局長次官を歴任した沢柳政太郎であった。これらの人びとは社会教育のいわば草創期にあつて、社会教育発展の氣運を醸成した人たちであり、これら人びとの努力が因となり果となつて、しだいに社会教育行政機構が組織され、整備されるのである。

しかし、何といつてもわが国の社会教育行政が広範囲に拡充整

備され、少なくともその基礎が固められたのは、明治末期であり、具体的には明治四十四年文部省に通俗教育調査委員会が設置された時期であつたと思われる。その意味において、牧野伸顕のあとをついで四十一年七月から四十四年八月まで文部大臣の要職にあつた小松原英太郎と、小松原に迎へられて文部次官となり、通俗教育委員会の組織を確立した岡田良平を見のがすことはできない。この意味で「社会教育行政を育てた人びと」列伝は先ず小松原英太郎と岡田良平の両氏から筆を染めなければならぬ。

## 二 小松原英太郎

小松原英太郎（一八五二—一九一九、嘉永五年—大正八年）は富山藩士小松原莊二郎の長男として生まれた。幼年から漢字を学び、明治七年上京して慶応義塾にはいったが一学期で退塾し、友人らと政治経済などを勉強した。明治八年評論新聞社の編集長となり、自由民権論の立場から大いに政府を攻撃した。明治九年「圧制政府転覆すべきの論」が筆禍を招き獄中の人となったが、十一年出獄、朝野新聞にはいり、翌十二年には岡山で山陽新報を発売した。しかし明治十三年に外務省にはいつてから官号にみちを求めることになった。明治二十年ベルリン勤務から帰国、内務省に転じて埼玉県知事、警保局長、静岡、長崎両県知事、司法次官、内務次官を歴任、三十三年貴族院議員に勅選された。同年大阪毎日新聞社長となつたが三十六年辞任、三十九年には産業組合中央会の副会頭となつた。明治四十一年七月第二次桂内閣の文部

大臣となり、四十四年八月まで勤め、学制改革問題、南北朝問題などの重要問題に当面したが、特に幸徳秋水事件を契機とする国民道徳振興問題と関連して、教員待遇の改善、実業教育の振興、社会教育の振興（具体的には通俗教育、文芸各委員会の設置）などの対策を論じた。その後教育調査会委員、臨時教育会議委員をつとめたが、大正五年枢密顧問官に任ぜられた。なお拓殖大学長、国学院大学長、皇典研究所長などもつとめたことがある。

「文部省の教育施政方針は、小松原現文相に至つて、著しく社会教育的傾向を帯び来れり」と明治四十二年十二月十五日号の教育時論にも指摘されたように、小松原の社会教育に対する関心はなみなみならぬものがあつた。その理由としてはいろいろ考えられるが、一つは彼の履歴からも察せられる通り、新聞記者としての過去の経歴が民衆教育の重要性に眼を開かせたのであるうし、他面内務官僚や知事としての経験と、三十九年以来産業組合副会頭としての地位が、当時産業組合の事業目標の眼目でもあつた地方自治法と地方産業の振興に深い関心をもたせたものである。しかもこのことは教育と「密接なる関係」をもつものであるから、「教育普及に對する目下の急務は、社会教育普及の改善に在りとし、通俗講演会、教育幻燈会、巡回講話等を奨励し、一面学校との連絡を鼓吹」（前掲教育時論）したものとされる。明治四十二年正月社会教育についての談話として時事新報に掲載された彼の談話、「教育は元來單に学校にのみ限られた事業に非ず家庭教育、社会教育等彼此相俟つて始めて効果を挙げべきは今更

事新しく言うまでも無きことなるが従来我邦にて教育と云へば一般には直ちに学校教育を指すものと解せられ家庭社会等の教育が割合に等閑視せられたるは甚だ遺憾の事と言わざるを得ず……社会教育を誘導奨励して十分の発表を遂げしむるは蓋し現今の急務なるべし」は、彼の社会教育観をしめすと同時に、それから六十年近くたった今日依然として同様の嘆きがくり返されていることにいささか感慨なきを得ない。

また彼の在任中内務大臣であった平田東助は産業組合中央会の会頭の地位にあり、ともに報徳教の信奉者であった。しかも彼が次官として任用した岡田良平の実弟一木喜徳郎は内務次官であったから、従来とかく調和を欠きがちであった両者の関係が緊密になったことは疑いなく、文部の施政が内務省の地方自治振興政策の線に沿って、いわゆる「地方改良的社会教育」が促進されるであらうことは想像にたたくない。そしてこのことは当然中央地方を通じて社会教育行政組織整備へ彼の意欲を傾斜させたものと思われる。

小松原が社会教育の事業として考えたのは、

- (一) 積極的方面 通俗講談会、通俗図書館、通俗博物館の設置、劇場客席の改良等
- (二) 消極的方面 未成年者の飲酒喫煙の禁止、各種の矯風会等の事業

であったが、後に設置された通俗教育調査委員会の事業は彼のいう積極的方面に照応するものであった。

彼はまた青年の教育にとくに注意を払い、地方における社会教育の重要な足場として青年団体の存在を重視した。しかしどちらかといえば青年の風紀維持といった道徳教育面に対する関心が強かった。彼は日露戦役後「一般社会の風紀漸く弛み、青年の気風情弱に流れ、勤勉着実を欠く傾向あり」として、地方教育会が絶えず地方風紀の廃頹、人情風俗の模様に注意し、地方風紀の改善、国民品性の陶冶、国民道徳の進歩向上につとめることを要望した。四十三年三月彼は補習教育に関し功績ある優良青年団八十二団体を表彰した。優良青年団表彰の初めである。彼は青年団体の事業としては風紀維持を第一に、次いで夜学および補習の設備を重視した。

明治四十四年五月彼が通俗教育調査委員会および文芸委員会を設置したのは、彼の日ごろの構想を実現したものであったが、これを促進したのは前年起こった大逆事件であった。したがってこの委員会は国民思想健全化のための社会教育の奨励を直接の目的として設置されたのである。小松原は大逆事件直後「刻下の急務として (一)師範教育の改善と小学校教員の優遇 (二)実業補習教育及び低度の職業教育の奨励普及 (三)社会教育の奨励と興隆の三項をあげているが、両委員会の設置はその第三項に該当するものであった。

通俗教育調査委員会は通俗教育に関する事項を調査審議するもので、文部大臣の命により通俗教育に関する講演または材料の収集および製作をなすものとされた。委員会は三部に分れ、第一部

では読物の編集と懸賞募集ならびに通俗図書館・巡回文庫・展覧会事業に関する事項を、第二部では幻灯画および活動写真のフィルムを選定・調製・説明書の編集に関する事項を、第三部では講演会に関する事項ならびに講演資料の編集その他をつかさどることになっていた。委員長には文部次官岡田良平を、幹事には普通学務局長田所美治を当て、これに委員二十五名を加えて構成された。しかしもともこの委員会は調査委員会と呼ぶものの、文部省の原案としては「通俗教育上の中央機関」として、地方公共団体、教育会、青年団体その他地方諸団体をして地方における通俗教育に当たらしめるといった、あたかも事実上の社会教育局を設置し、全国の教育会・青年団等を駆使して社会教育の推進を果たそうという構想であったが、一部委員の反対によって原案は修正され、中央社会教育行政機関として性格は弱められた。しかし委員会の活動内容は、その後大正から昭和の初めにかけての社会教育の主要部分を指向するものであり、その後の社会教育行政の対象領域を規定する結果を將來した。幸か不幸か文部省の最初の企画は瓦解に帰したとはいえ、この調査委員会は社会教育行政機構確立への端緒を開いたものといえることができる。通俗教育調査委員会はその後大正二年行政整理のさい廃止されたが、その事業の一部は文部省の普通学務局に移され、やがて第四課として社会教育行政の中枢機関として発展する素因となったからである。

その意味で小松原はわが国の社会教育行政を育てた人びとのなかでは先ず指を屈しなければならぬ功労者の一人である。少なくとも

とも彼も自讃するように「通俗教育勃興の氣運」を醸成した功績は見のがすことはできない。しかし何事もひとりの力では成就することはできない。彼を助け、彼がその理想や抱負を實現に移した際の功労者として、終始彼を補佐し、彼と艱難をともにした当時の次官岡田良平の名を忘れることはできない。

### 三 岡田良平

岡田良平（一八六四—一九三四、元治元年—昭和九年）静岡県小笠郡倉真村において、遠江の藩士岡田良一郎の長男として生まれた。岡田家は遠州有数の素封家であり、当主は代々庄屋をつとめ、有誠の士であった。ことに祖父清忠は報徳教を深く信奉し、また家産を興してこの地方の中心人物ともなった人である。父良一郎はそのあとを継ぎ、家塾「冀北学会」を建て、近在の子弟の教育につくし、明治八年二宮尊徳の教えを基盤として報徳社を組織し、その社長となった。そしてこれが後に中央報徳会（明治三十八年）となり、さらに大日本報徳社（大正十三年）に発展するのである。彼はまた政治にもたずさわらず、文字どおり地方の信望を一身に集めた人物であった。

岡田良平はその家に生まれ、幼少より報徳教の薫化をうけ、謹厳な家庭教育によって育てられた。小学校を卒業するや、冀北学会において英語、漢字を学んだが、明治十二年上京して府立第一中学校を経て大学予備門に入學、明治十六年東京帝國大学文科大学に進み、哲学を学んだ。大学卒業後大学院にはいってさらに研

究を続けたが、明治二十三年第一高等中学校に奉職、明治二十六年文部省にはいり、その後昭和二年に文部大臣を辞任するまで一貫して教育行政に関係し、教育行政史上多くの業績を残したのであった。

文部省にはいつて後は視学官、参事官、山口高等中学校長、文部省書記官、視学官兼参事官、高等教育会議員を歴任した。第二次山県内閣の樺山文部大臣のとき参事官となり、教育基金会の施行および実業専門学校の設立につくした。その後明治三十三年実業学務局長となり、翌三十四年菊池文部大臣のもとに総務長官となり、その後明治三十六年まで二年余三代の文部大臣に仕え、専門学校の施行、私立学校の発展に尽力し、また教科書国定制度の発端を開いた。明治三十七年には貴族院議員に勅選され、明治四十年には京都帝国大学総長となった。そして明治四十一年第二次桂内閣のとき、小松原文部大臣のもとに文部次官となり、南北朝正閣問題に関する歴史教科書の修正、高等中学校会の制定、通俗教育調査委員会および文芸委員会の設置等について、文字どおり文相の片腕として活躍した。その後大正五年十月寺内内閣の文部大臣となり、臨時教育会議を興し、明治三十年代以来多年の急案となっていた学制改革の問題を解決した。岡田はこの問題に關しては参事官時代から關与しており、教育調査会の委員も兼ねていたので、学制改革は彼の積年の關心事であったのである。また義務教育国庫負担法の制定、國民道德の振興を基盤とする各学校の教育目標の設定等につとめ、後の文教政策の方向決定に重要な役割を果たした。大正十三年には加藤内閣に迎えられて再度文部大臣となり、配属将校による学校教練を開始し、青年訓練所を設置して、軍事訓練を学校教育および勤労青少年教育に導入したのである。また後にもふれるように、岡田は社会教育にも関心深く、明治末年から自ら報徳社の社長であったが、官民有力者の協力を得て中央報徳会を創設し、産業組合中央会の会頭もつとめ、地方改良事業の推進、教化団体の育成、國民教化運動の振興等社会教育面においても重要な役割を演じた。昭和八年には文政審議会副總裁となり、枢密顧問官としても教育の発展に寄与した。

彼が小松原とともにわが国社会行政組織整備のため通俗教育調査委員会を設立した前後に果たした役割についてはさきに述べた。しかし彼はやがてわが国文政の最高責任者として彼の抱負を実現する機会を与えられた。岡田が文部大臣として台閣に列したのは、大正五年十月から同七年九月までと、大正十三年から昭和二年四月までと前後二期に及んだ。

第一期における社会教育行政に対する彼の功績は何といっても臨時教育会議を設置し、通俗教育の改善策について諮問したことであろう。臨時教育会議が社会教育に関する彼の諮問に答えたのは大正七年十二月のことであり、岡田はすでに閣僚の席から退いた後のことであった。しかしその後のわが国の社会教育行政の改善と拡充に画期的な役割を果たしたこの答申には、むしろ彼の在任中の成果であったといつてよい。この答申の内容は十一項にわたるものであったが、そのうち一項から四項までは社会教育の行

政に関するものであった。すなわち

一 朝野關係各方面ノ連絡ヲ保チテ通俗教育ニ關スル事項ヲ審議スルヲ爲メ文部省ニ調査會ヲ設置スルコト

二 通俗教育ニ關スル施設ノ計画及実行ノ任ニ當ルヲ爲メ文部省ニ主任官ヲ設クコト

三 地方団体及教育會其ノ他ノ公益団体ノ協力ヲ促シ可成各地方ニモ通俗教育ニ關スル主任官ヲ置カシムルコト

四 通俗教育ノ事ニ當ルヘキ者ヲ養成スルヲ相當ノ施設ヲ爲スコト

というものであった。やがてこの答申は着々として実施に移されたが、この実現に、大きく貢献したのは、大正八年普通学務局長第四課長になった乗杉嘉寿であった。

第二期における岡田の社会教育行政に対する最大の貢献は青年訓練所制度の創設であろう。青年訓練所は臨時教育會議において学校に兵式教練が取り入れらるべき建議がなされたことに淵源する。大正十四年学校に現役陸軍將校を配属して教練する制度について、小学校修了後勤勞に従事する青少年に対して兵式訓練の施設を設けるため、大正十五年四月二十日青年訓練所令および青年訓練所規程が公布された。青年訓練所は十六歳から二十歳までの男子を四年にわたって訓練するものであり、大正十五年この制度が創始された際設立された青年訓練所数は一万五千五八八、生徒数八九万一千五五五名に及んだ。そしてこのとき岡田を助けて、この制度を実現せしめるにあつた力があったのは、当時

普通学務局長であった関屋龍吉であった。関屋は岡田の深い信託を受けていたのである。

#### 四 乗杉嘉寿

「社会教育行政を育てた人びと」列伝のなかで、続いて取上げるべき人物は、文部省における最初の社会教育關係事務を主管する独立の課、すなわち普通学務局の第四課の長となった乗杉嘉寿であろう。

乗杉嘉寿（一八七八—一九四七 明治十一年—昭和二十二年）は富山県乗杉寿貞の二男として東京府に生まれた。明治三十七年東京帝国大学文科大学哲学科を卒業、直ちに大学院にはいり実践哲学を専攻したが、同年十月文部属に任ぜられ普通学務局に勤めた。四十年八月普通学務局第二課長となったが、四十一年第五高等学校教授となりやがて生徒監に補せられ、学生の指導に当たった。四十三年関東都留秘書官となり大連に赴き、文書課および秘書課に勤務した。びたび課長代理をつとめた。大正二年十二月再び文部省に復帰し、督学官に任ぜられたが同年時局に関する教育資料調査委員となり、学者研究者を動員して広く内外の状況を調査せしめ、その成果を刊行した。また有力な資料を展覧し、多大の好評を博した。このときフィヒテ、デーイー等も紹介され、通俗教育はいちだんの進展を見るに至った。同六年教育および教授法研究のため一か年半米国および英国へ一か年半の留学を命ぜられたが、彼はさらに時局教育状況視察のためフランス、イタリア

等を巡遊し、七年十二月帰朝、八年一月文部省図書官兼督学官に任ぜられ、同年四月文部事務官として普通学務局勤務を命ぜられ、通俗教育の主任官となった。同年六月普通学務局に第四課が新設され、課長となる。

彼は大正十三年六月松江高等学校長に転出するまで、主任官や第四課長時代自ら社会教育課長と称したほど、社会教育の振興に熱意を見せ、終始獅子奮迅の活躍ぶりを示した。昭和三年東京音楽学校長に迎えられ、邦楽部を特設した。その後も文部省の社会教育調査委員、著作権審査委員会などをつとめ、引きつづき社会教育のため尽力したが、昭和二十年十月退官、翌二十二年二月一日逝去した。

さきに臨時教育会議の決議に基づいて文部省に通俗教育の主任官が置かれ、やがて通俗教育の關係事務を主管する第四課が新設されたことは述べたとおりであるが、このことは社会教育行政機構の中枢部が始めて生まれたことを意味し、わが国の社会教育は新段階を迎えるのである。

第四課は従来の通俗教育、図書館、博物館、盲啞教育・特殊教育、青年団体、教育会を取扱うものとされたが、当時の社会教育事務の主要目は、だいたい左記のようなものであった。

- 一 学校事業の拡張に関する事項
- 二 青年団外女会に関する事項
- 三 生活改善の研究並に奨励に関する事項
- 四 教育的観覧施設に関する事項
- 五 図書館に関する事項
- 六 通俗図書認定に関する事項

るのは、大正十三年十二月二十五日のことであり、その課長になったのは後に述べる小尾範治であったのである。

明治四十四年の通俗教育調査委員会管制制定当時から社会教育がとかく社会主義と混同されるおそれありとして、長い間文部省がことさらに忌諱してきた「社会教育」を敢然として主張しつづけた乗杉の勇氣は正に大したものであった。なぜなら当時第一次大戦後の社会主義思潮が一部に宣伝され、これを極度に警戒した文部省は直轄学校に通牒を発してこれが禁圧を命じたため、一部の学校では社会主義と關係あるなしかかわらず、いやしくも「社会」の名のつく書籍をいっさい廃棄したとさえ伝えられた時代であったからである。彼は「寧ろかくの如き危険な外来思想に對しては、最公正にして且穩健な思想を宣伝し之を理解せしむるに努むるのが、社会教育の思想善導の施設となるのであって、却って社会教育は今日の様な社会の思想傾向の險惡な場合に一層必要を感じる訳である」(乗杉嘉寿「社会教育の研究」大正十二年)として、社会教育の積極的意義を強調したのである。

彼はまた欧米における彼の見聞をもとにして、学校拡張、図書館、補習教育の重要性を主張し、また民衆娯楽、民衆体育、生活様式の改善の必要を説き、他面わが国の学校教育が社会から遊離し、画一的統込み教育に堕しているとして「学校教育の社会化」を強調し、その方法として学校における講演会、講習会の開催や学校施設の開放をとりあげた。もちろん彼の考えはこれまでの社会教育の基本路線を変えようとしたものではなかったが、少なくともこれに新しい近代的方法や手段を導入しようとしたものであり、そこに彼の歴史的な位置と役割を見出すのが妥当であろう。

- 七 善良なる號物の普及奨励に関する事項
- 八 民衆娯楽に関する事項
- 九 幻燈活動写真フィルム認定に関する事項
- 一〇 公衆体育に関する事項

- 一一 貧困児童の就学に関する事項
- 一二 特殊児童の教育に関する事項
- 一三 育英事業に関する事項
- 一四 職業指導に関する事項
- 一五 思想問題に関する事項
- 一六 教育会に関する事項
- 一七 盲啞教育に関する事項
- 一八 公休日利用に関する事項
- 一九 校外取締に関する事項

当時通俗教育調査委員は民衆娯楽調査委員と改められ、民衆娯楽に関する調査研究に当たっていた。これは後に社会教育委員の名称に変えられた。

こえて大正十年文部省官制の改正の際、「通俗教育」の用語が「社会教育」に改められた。明治中期以来かなり一般的に使用され、通俗教育調査委員会の生みの親である小松原英太郎すら講演などにおいては常に社会教育という用語を用いたにもかかわらず、正式な官用語として決して使用されなかった「社会教育」がようやく陽の目を見たのである。これは主任官就任以来自ら「社会教育」を標榜した乗杉の努力の結果であった。しかし彼は遂に正式の「社会教育課」長になることなく、松江高等学校に転出した。文部省分課規程が改正されて、第四課が「社会教育課」とな

彼は臨時教育会議の答申の線に沿って社会教育の推進に当たり、着々と実行に移していった。その中でも彼が第一に手がけたのは学校拡張であった。すなわち文部省は大正八年始めて成人に広く教育の機会を与えるため、全国各地の大学および直轄学校に委嘱して講演会、講習会を開催した。文部省が開設した成人教育講座の始まりである。この種の施設はその後、年を追って拡充された。

臨時教育会議は上述のように文部省に通俗教育の主任官を置くことを決議したが、同時に各地方にも同様の主任者を設けることを勧告することを忘れなかった。その結果文部省においてはいはちやく主任官の設置を見たが、各地方に主任者を配置することは必ずしも容易のことではなかった。なぜならそれに必要な人件費をねん出することが困難であったからである。そこで日清戦役の賠償金の利子五十万円を以て、これまで人件費を除き、普通教育、通俗教育、青年団体等の経費にあてられていた教育資金を、地方における社会教育事務取扱主任吏員設置のために使用する方途を講じ、右吏員一名分に対する俸給手当にあてため、年額およそ二千元以内を道府県に交付することによって、全国に社会教育主事を設置せしめることに成功したのである。この通牒が発せられたのは大正九年五月五日のことであり、ここに地方における社会教育行政機構確立の第一歩が印せられたのである。こうして中央地方を通じてわが国の教育行政はいちだんの整備を見ることがになった。しかしそれに組織をつくるのみでじゅうぶんの効果をあげることは困難なので、大正九年六月社会教育事務担当者対象とする社会教育講習会を開いて彼らの研修指導に当たるほか、

同年十月には社会教育調査室に社会教育研究会を設けて、社会教育の発展を期したのである。大正十年には第一回全国社会教育主事会議を開催した。

彼は「大正十年「図書館教習所」を設けて、図書館職員養成に着手したが、これは図書館事業にとって画期的な奨励策であった。団体指導の面では、青年団に対しては従来の政府の方針を踏襲発展させ、修養の手段として補習教育を重視した。また大正十一年には欧米のボーイ・スカウトを範とする「少年団」について、三島通庸等の少年団指導者、学校教育関係者等を委員として研究調査に手をそめた。彼はまた民衆娯楽の健全な発展については深い関心をもち、映画、図書等の推薦制度を確立した。

彼の真面目を躍如たらしめたのは、実は大正十二年の関東大震災当時の活動ぶりであった。彼はいち早く日比谷および上野公園においてレコード・コンサートを開いた。当時多くの人びとは焼野原のなかでわびしいブラック生活を送っており、何のうるおひもない日々を過ごしていたので、拡声機をつかつてのコンサートは彼らの大歓迎するところとなり、これが民衆の復興への意欲を高めたことはいままでもない。彼はまた日比谷音楽堂に災害児童を集め、近県から急きょとりよせた教科書を用意し、大学生に命じて連日彼らの補習教育に当たらせていたのである。縄張り意識の強い官僚のなかにおいて、専門学校局長の了解もなしに大学生を駆使するのはという一部の非難に対して、彼は文部省を代表してやったのだと、その意気たるや正に当たるべからざるものがあつた。また三島通庸等を督励して、ようやく組織された少年団の実際活動として罹災者の救済にあたらしめる等、文字どおり七面八びの活動ぶりを見せた。

彼はまた現在の皇后陛下、当時の久通実良子女子が罹災者のために着物を縫っておられるお姿を撮影し、これを震災映画にとり入れ、この映画を利用して全国九十か所で講演会を開き、国民の精神作典を呼びかけたのである。当時文部省の予算は二万円しかなかったもので、不足分二万円は彼が中山太陽堂に交渉して寄附を求めたものであつた。またこのとき現在の今上陛下、当時の摂政官が早朝八時焼あつたを視察されたが、この写真は陸軍省が日活に命じて撮影したものであつた。彼は宮を軍のみが独占することを不可とし、自ら陸軍大臣のもとに赴いて同意を得、文部省の映画に加えるなど、その行動は端倪すべからざるものがあつた。普通官僚にして容易になし得ざるはなれわざであつたといえよう。このことがもとになって後宮内省映画はすべて文部省の手によって頒布することになった。彼は陛下の行幸啓の際の学生の堵列の世話も引受けるなど、およそ他の部局に属せざる事務はいっさい社会教育としてとり上げたのであつた。このような彼の活動ぶりが規矩準繩を重んじる官僚の間に摩擦を生じがちであつたことも想像するに難くない。「油乗杉」の署名はこうして彼に授けられたのであろう。しかし彼が社会教育を文部行政の一角にくいこませ、社会教育行政の地位を固めた功績は忘れることはできない。

(つづく)

編集後記

☆十一月末に有田前文相から学力調査に関する今後の方針が発表されました。それによれば、今後の学力調査は、国および地方の教育行政機関がその結果を各種の施策に役だたせることを目的として、小学校および中学校の各最終学年の児童生徒につき、昭和四十四年度から、それぞれ、おおむね三年ごとに、国語の読み書き、読解等に關する基礎的能力および數量等に關する基礎的能力を中心として、悉皆調査を行なう建前とし、調査の内容等細部については、今後検討するものとする、としています。

くりをかねて学力調査の特集を行ないました。  
★東京教育大学教授、橋本重治先生に「学力とその評価」について執筆をお願いしました。ここでは学力評価の問題は、その第一段階の仕事として、学力を分析し、分析された一つ一つの学力の構造や特性を明らかにすることが必要であり、その分析のし方は教科によって、経験的領域による分析、機能的機能的分析のいずれかの方法によってなされることが指摘展開されています。  
その他、小学校・中学校別に各教科にわたって、担当の教科調査官に執筆していただき、各年度の学力調査の結果を中心として、正答状況の推移や、学力の弱い面、基礎的知識や技能の習得など問題点を明らかにしました。

ME J 9482

文部時報 十二月号

第一〇七三号

昭和四十一年十二月五日 印刷  
昭和四十一年十二月十日 発行

所著権 文 部 省

発行者 株式会社 帝国地方行政学会

小川平二

印刷所 株式会社 行政学会印刷所

東京都立川市曙町三の五五

営業所

株式会社 帝国地方行政学会 館別

電話 (268) 二二四(代)

振替口座 東京一〇、〇〇〇番

購 読 料	
定価	一冊 七十円
送料	〃 六円
一か年	八百四十円

(前納の場合は送料不要)

ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申しつけます。なお購読の申し込みは、直接発行所またはよりの書店にお願いします。



# 文部時報

第 1074 号

昭和42年 1 月

年頭の所感

劔木 亨弘 2

今後の教育に期待するもの

松下幸之助…………… 4 藤井 丙午…………… 9

坂西 志保……………14 諸井 三 郎……………18

将来の国民生活と教育 矢野 智雄 22

経済発展と教育 矢野 智雄 29

——新経済計画における教育の問題——

わが国における

教育と経済の発展に関する一考察 奥田 真丈 35

小・中学校における学力のひらき 笹岡 太一 45

\* \* \*

資料紹介

1985年への考察

——フランスの長期展望—— 大臣官房調査課 57

〔所轄機関紹介③〕 緯度観測所 千田 誠一 68

〔随想〕 成田 喜英 77

〔新刊紹介〕…………… 74

〔最終回〕 人物を中心とした社会教育史

社会教育行政を育てた人びと（その二）

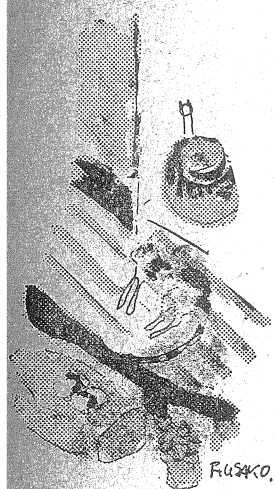
駒田 錦一 82

昭和42年度使用表紙図案入選者一覧…………… 13

文部省の会議・行事等から…………… 64

文部省重要通達一覧…………… 95

表紙 城野聡 カット 須貝夫早子

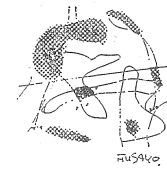


岩国錦帯橋

岩国の狭い町中を抜けると、眼前が急にひらけ、純日本的な風景がそこにあった。木々のしげる小高い山の上にそびえる白亜の岩国城天守閣、そのふもとを流れる錦川にかかる五条の奇橋錦帯橋。日本の歴史が山陽路の奥でひっそりと息づいている感じだった。〈梢〉

## 人物を中心とした

## 社会教育史



駒田 錦一

## 社会教育行政を育てた人びと(その二)

## 五 小尾 範治

天衣無縫というか、とかく奔放闊達で、「猪突的に社会教育振興に邁進した」乗杉が、わが国の文部行政の一角にうちこんだ社会教育行政を、より合理的に、より思索的に、より体系的に整備し発展させたのは、乗杉の後を継いで第四課長になった小尾範治であった。彼は乗杉が松江高等学校校長に転出した後、大正十三年五月普通学務局長に就任したばかりの関屋龍吉に迎えられて、同年六月小樽高商教授から文部省にはいった。関屋と小尾は一高時代からの旧友の間柄であったのである。

小尾範治(一八八五—一九六四、明治十八年—昭和三十九年)は山梨県小尾礼七の長男として同県北巨摩郡甲村に生まれた。明治四十三年東京帝国大学文科大学哲学科を卒業、ただちに大学院にはいったが大正元年退学、大正二年福岡県立八女中学校、大正六年山梨県立甲府中学校の教諭となり、大正七年小樽高等商業学校教授、同年より二年間倫理学およびドイツ語研究のため米国およびドイツに留学し、さらに英伊を巡遊して、十三年帰朝したが、同年六月文部省に迎えられ、普通学務局第四課長を命ぜられた。

た。同十三年十二月文部省官制分課規程の改正により第四課が社会教育課と改められたとき、名実ともに、初代の社会教育課長となった。昭和四年七月文部省に社会教育局が新設されたとき、社会教育官兼督学官となり、同局成人教育課長に任ぜられ、庶務課長を兼務した。昭和七年四月社会教育局青年教育課長に転補されたが、依然庶務課長を兼任した。昭和九年五月文部省を辞し、日本放送協会の初代教養部長となり、わが国の教育放送の普及と発展に貢献した。昭和十五年放送協会を辞し、ゆうゆう自適の生活にはいったが、その後は彼の本来の専門である哲学や倫理学の研究と著述に専念した。昭和三十九年一月十二日せいか。

彼はつとにスピノザのエティカ(倫理学)を翻訳出版したが、このほか主要な著書として、左のようなものがある。

社会教育思潮	昭和二年
社会教育の展望	同 七年
世界の青少年運動	同 十年
社会教育概論	同 十一年
学校放送の実際とその利用	同 十三年
生・道・教	同 十五年
世界 哲学	同 十八年
ブルーノの世界観	同 年

さきにも述べたように文部省の普通学務局は大正八年四月従来

の三課に第四課、第五課を加えて五課編制となり、第四課がこれまでの通俗教育に関する事務を取扱っていたが、その管掌する事務はきわめて広範囲にわたるものであった。大正十三年十二月二十五日文部省の分課規程が改正されたとき、普通学務局は学務課、社会教育課、庶務課の三課に再編成されたが、このとき第四課から改称された社会教育課の所管事項にも若干の移動があった。すなわち、旧第四課の所管事項のうち盲啞教育および教育会に関する事務は学務課に譲られ、社会教育課は、一、図書館および博物館、二、青少年団体および処女会、三、成人教育、四、特殊教育、五、民衆娯楽の改善、六、通俗図書認定、七、その他社会教育に関する事項を主管するようになった。このことは社会教育課の実現を機として、社会教育固有の事務領域がしだいに明確化され、社会教育行政の体制がほぼ現状に近いものに整理されたことを意味する。その後わが国の社会教育行政の力点は男女青少年団体の指導と成人教育、それに加えて従来の通俗教育の中心であった民衆娯楽や通俗図書の普及改善にしばられることになった。昭和四年社会教育局が創設されたとき、青年教育、成人教育および庶務の三課に編成されたのは、社会教育課創立当時の行政体系を基盤としてこれを発展させたものといつてよい。いずれにせよ、わが国の社会教育行政、少なくとも戦前までのその基本的方向は関屋小尾のコンビのもとに確立されたといつても過言ではない。そ

の意味において小尾の果たした役割はきわめて重要であった。

彼はその著「社会教育概論」において、「わが国の独創にかか  
るものと言つてよい」社会教育という言葉を定義し、社会教育は  
「社会が社会によって社会を教育するところの教育」であるとし、  
その角度から社会教育の主体と客体を考えた。まず社会教育の主  
体としては、ひろく社会人と機関施設をふくめ、「およそその対象  
にある教育教化の作用を及ぼしうる者であれば、何人であっても  
教育の主体としての立場をもつことができる」とし、また機関と  
しては、「それが教育的意義をもちうる限り社会教育の機関とし  
て利用することができる」とした。また客体に関しては「総べて  
の社会人」が社会教育の対象となると述べた。このような立場か  
ら、社会教育の対象として、学校の児童生徒を含め、ことに児童  
の校外生活の指導を重視した。また「両親に代つて、青年に対し  
適切な指導を施し、青年の危機を過ちなしに経過せしめること」  
は社会教育の重要な任務であるとし、青年学生を対象とする各種  
の教育教化運動を欠くべからざるものと考えた。

彼はまた義務教育修了者にして職業に従事している一般青年に  
対する教育の重要性を強調し、壮丁教育調査における尋常小学  
校・高等小学校・実業補習学校後期それぞれの卒業生の成績の比  
較検討から、ひろく勤労青少年に対する補足継続教育の必要性を  
説いた。さらに青年のみならず、すでに職業生活または実生活の

第一線に立っている一般成人に、「その余暇を利用して教育に与  
らしめることは最も肝要なこと」であるとした。このような考え  
から、彼は社会教育の対象を主として青少年と成人に分け、そこ  
から社会教育を体系づけ、それを社会教育の行政施策に移してい  
ったのである。

彼は大正十三年最初の社会教育課長に就任して以来着々として  
社会教育行政の整備と充実に当たったが、十四年には地方社会教  
育職員制を公布して、地方における社会教育行政の確立を図つ  
た。また、各種社会教育団体を助けてその中央組織を成立せしめ  
た。すなわち大正十三年には大日本連合青年団、教化団体連合  
会、昭和二年には大日本連合女子青年団、昭和三年には財団法人  
教化団体中央会、昭和五年には大日本連合婦人会、昭和六年には  
日本労働者教育協会等である。

ことに特筆すべきことは、大正十五年「青年ノ心身ヲ鍛練シテ  
国民タルノ資質ヲ向上セシムル」ことを目的として、おおむね十  
六歳から二十歳までの男子を対象として、「青年訓練所」を設置  
したことであろう。ここにわが国の青年教育制度は新しい段階に  
はいるのである。

社会教育局成立後成人教育課長となり、成人教育行政の発展に  
力を尽したが、特に注目すべきことは、このとき始めて文部省の  
所管となった労働者教育の一環として労働者輔導学級を開設した

## 六 下村 寿一

こうしてようやく成熟したわが国の社会教育行政は、その中枢  
機関として文部省内に社会教育局創設の気運を醸成し、昭和四年  
ついにその誕生を見るのであるが、初代の局長として迎えられた  
のは下村寿一であった。

下村寿一（一八八四—一九六五、明治十七年—昭和四十年）は  
明治十七年下村與七郎の長男として京都府与謝郡加悦町に生まれ  
た。明治四十三年東京帝大法科大学政治学科を卒業、山形県属、  
同警視、富山県および東京府理事官を歴任し、大正六年文部省参  
事官として普通学務局に勤務、同八年同局第一課長に任ぜられ、  
その後秘書課長、文書課長を経て、大正十三年宗教局長となる。

昭和四年七月文部省に社会教育局が創設されたとき、初代の社会  
教育局長となった。彼が社会教育行政に直接関与したのはこの時  
が初めてである。彼は新しい局の創設事務に当たり、これが整備  
と拡充に尽精したが、当時浜口内閣の最大の課題であった経済再  
建と国民精神の作興をはかるため、政府の重点施策として取り上  
げられた教化総動員運動の主管部局の責任者として、これまで宗  
教局長として彼と関係深かった宗教団体や教化団体等を動員して  
国民運動を展開したことこそ彼の精魂を傾けた大事業であり、む  
しろ彼の本領であったといえよう。しかし、彼はこの職にあるこ

ことであらう。この学級は、「青年及成人労働者中優秀なる人格  
才能を有する者に対し一般的教養並訓練を与え是等労働者の中堅  
人物を通じて一般労働者の教養を高むる」ことを目的とし、毎週  
二回、毎回約三時間授業を原則とし、一組の生徒定員を約五十と  
し、労働者の多い主要都市に開設した。この教育方式はイギリス  
のテュートリアル・クラスにならったもので、指導員において学  
習の指導に当たらしめた。また学習のカリキュラムはドイツの民  
衆大学にその範をとったのではないかと思われる。このような新  
しい労働者教育の方式が考案されたのは、外国の教育事情に対す  
る知識経験の豊かであった小尾の創意にまつこと大であったと思  
われる。後に輔導学級とあわせて、一般労働者を対象として実施  
した「労働者講座」の修了生からなる日本労働者教育協会が設置  
されたが、これはまさにイギリスの W・E・A の創立を想わせる  
ものがあつた。

今一つは彼が昭和五年家庭教育振興に関する文部大臣訓令に基  
づき、家庭教育振興のため、従来の婦人講座、家庭教育講座に加  
えて「母の講座」を開設したほか、婦人団体の「奮励を促し之を  
通じて一般婦人の自覚を喚起する」（大臣訓令）ため、全国婦人団  
体の連絡、指導機関として「大日本連合婦人会」を結成せしめた  
ことであらう。

と三か月余、十月には職を辞し、野に降ったが、昭和七年再び宗教局長に復帰し、昭和九年普通学務局長に任ぜられた。昭和十年東京女子高等師範学校長となり、文政審議会、宗教制度調査会、教育審議会、宗教教化方策委員会、日本諸学振興委員会等の委員を兼ねたが、昭和二十年女子学習院長となり、これが廃止になるまで在任した。その後宗教審議会、文化財保護委員会等に関与したが、昭和四十一年一月九日せいに去した。

彼は、昭和四年七月一日勅令二一七号により、社会教育局が創設されたとき、初代社会教育局長になったのであるから、その意味においては、社会教育行政整備発展の功労者といふことができる。しかし、彼は局設置と同時に宗教局長から、すでに御膳立のそろうた社会教育局にその長として座ったのであるから、少なくとも局創立までの実質的な功績は、局昇格に値するだけの社会教育行政事務領域の拡充と整備を行ない、そのための条件を整えた前記小尾社会教育課長や常に彼を背後から支持激励し、また自ら青年教育行政に新しい方向を開いた関屋普通学務局長に帰すべきであろう。新設の社会教育局の所管事務は、青少年団体、青年訓練所、実業補習学校、図書館博物館その他観覧施設、成人教育、社会教化団体、図書の認定および推薦、その他社会教育に関する事項とされ、青年教育、成人教育、庶務の三課がおかれ、同時に社会教育の「指導監督を掌る」社会教育官八名が新設された。彼

は、社会教育官に、その職務に必要な学識、技能、経験を有する者の中から高等試験委員の銓衡を経て特別に任用するみちを開いて、その陣容を整備したが、すでに述べたとおり彼の本領は、同年九月十日文部大臣訓令「教化動員ニ関スル件」によって内閣が大々的に展開した、いわゆる教化総動員運動の元締めとなり、これを推進したことにあった。教化総動員運動は下村を中心として初代成人教育課長兼庶務課長小尾範治と初代青年教育課長菊沢季磨とが協力し、前年行政制度審議会の決定に基づき文部省の専管となった青年団体、教化団体に加えて宗教団体、婦人団体等を動員して展開されたのである。

教化動員は、一、国体観念を明徴にし、国民精神を作興すること、二、経済生活の改善を図り、国力を培養することの二つを目的として発足したが、運動推進の基本方針として、

一 本運動は朝野一致して之に当り、特に各種教育機関及教化に關係ある民間諸団体並篤志者等の活動を促すこと。

二 趣旨徹底の方法は、講演、講話、印刷物の配布、其他地方の実情に応じ、最適最良の途を択ぶべきも、簡易平易を旨とし、力めて映画を利用すること。

三 本運動は愛国的奉仕運動たるべきこと

の三つをかけたが、教化の方法として、一方面的官庁の押しつけに終わらないよう留意した。国民精神の作興、経済生活の更新とい

う立場から、「各教化団体の平素の主義、教義主張をそのまゝ徹底してもらえば、それで結論として運動の主旨が達せられる」とした下村寿一の考えはきわめて賢明であった。事実中央教化団体連合会を始め、多くの社会教育団体はその全組織をあげて教化総動員の活動に従事し、協力の実をあげたのである。後に日華事変ぱつぱに際して、政府が昭和十二年に国民精神総動員運動を実施したとき、最初は社会教育局が中心となり、後に情報局にその重心がうつされたが、外郭団体として国民精神総動員中央連盟を結成してこの運動を推進し、常会の方法を採用して、その全国的な組織化と統一化をはかったことを想起するとき、時局の推移と方法

の変化にいささか感慨深きものを覚える。

彼はまた地方社会教育の第一線に活躍している社会教育主事の積極的な協力を求めることを忘れなかった。彼は特に全国社会教育主事会議を開催して、教化動員のすすめ方について協議し、彼らのこの運動に対する意欲をかりたせることに成功した。文部省自身としては、「思想文獻編纂調査会」に依頼して良書を選定させ、文部省の社会教育施設費で出版したこと、「日出づる國」「覚めよ國民」「二つの世界」などの教化映画を作製したこと。昭和四年度の成人教育講座を特に教化総動員と結びつけ、講座内容に、国民精神の作興、国体観念の涵養、国民生活の改善に関する事項を必ず加えることにしたことなどに止まったが、これら事業

の大部分は次の社会教育局長関屋龍吉に引きつがれ、実施されたのであった。

彼はきわめて謹厳誠直の人であり、一事をゆるがせぬ細心さと慎重さをそなえていた。筆者は彼が局長時代机の上に書類が山と積み上げられ、そのかげで執務していた真摯な姿をおもひ浮べる。彼の実施した教化総動員運動が一応の成功を収めたのは、時局の要請や彼の宗教局長としての関歴のほかに、彼の人柄に負うところが多かったであろう。彼はかたわら東大で教育行政を講じ、同名の著書がある。

## 七 関 口 泰

昭和四年青年教育課、成人教育課、庶務課の三課編制を以て発足した社会教育局は、時局の推移とともに課の編成にも若干の異動を生じた。すなわち、昭和十二年には庶務課を映画課と改称、十七年には青年教育、指導、文化施設の三課に再編成されたが、戦雲ようやく急を告げんとする昭和十七年十一月一日には、青少年教育課は国民教育局に、指導課は教育学局に、文化施設課は教化局に吸収され、社会教育局は十四年の歴史の幕を閉じたのであった。このことは社会教育行政の変容を意味するばかりでなく、社会教育そのものの実質的な転換を示すものでもあった。



四年間の空白を経て、社会教育局が再び文部省に登場したのは、終戦の年十月半ばのことであった。そしてその初代局長になったのが関口泰である。社会教育行政はここに新しい装いを整えて発足するのである。

関口泰（一八八九—一九五六、明治二十二年—昭和三十一年）は、明治二十二年三月関口隆正の長男として静岡市深草に生まれた。大正三年東京帝大法科大学を卒業、同年八月台湾總督府属となり土木局に勤務したが、その後事務官、業務課長、台北営業所長、台湾水力電気株式会社創立委員等を歴任した。その間同志とともに「匡社」を創設し、月刊雑誌「社会及国家」を発刊した。大正八年六月總督府を辞し、大阪朝日新聞社に入社、論説班員兼調査部員となったが、一年にして退社、十年には渡欧して英、仏、独、西、瑞典等各国の政治や社会状況を視察し、ジュネーヴの国際労働会議も参観した。十一年六月ロンドンで大阪朝日新聞社へ再入社したが、十二年東京朝日新聞社に転じ、通信部員、政治部員、調査課長、調査部長を歴任、十五年には編集局勤務となり、論説委員を兼ねた。昭和五年政治部長となり、七年にはペルリン特派員としてドイツに駐在したが、七か月にして帰社、論説委員となり特異の論陣を張ったが、十四年退社、客員となった。その後鉄道省嘱託や内務省委員となり、東亜交通公社、中日文化協会、華北交通公社等にも関係し、この間満州、朝鮮、華北、華中

等の各地を巡遊視察した。

戦後は、昭和二十年十月内閣議会制度審議会臨時委員となったが、十月二十六日文相前田多門に迎えられて教育研修所長兼社会教育局長となり、戦後の社会教育行政の再建に当たることになった。（ちなみに文部省に社会教育局が復活したのは十月十五日のことであり、局長の事務は次官大村清一が兼摂したので、大村が形式的には初代局長であるが、十日後関口が社会教育局長に就任したので実質的には関口が初代ということになる。）しかし、二十一年三月には病を得て辞任、その席を後任佐藤得二にゆずった。その後二十二年には論説顧問として再び朝日新聞に迎えられ、後社友となったが、内閣行政調査部顧問、大学設置委員会委員、内閣選挙制度調査会委員、国立教育研究所評議員を兼ねるとともに、社会教育連合会会長、公明選挙連盟理事等をもつとめた。二十五年四月横浜市立大学長となったが、二十七年七月辞任。昭和三十一年四月十四日せい去。

昭和二十年十月十五日文訓五七〇号をもって文部省に社会教育局が再組織されたとき、文部省の部課の編制にも大幅な異動があり、ほぼ今日の文部省の組織に近いものとなった。すなわち文部省の機構は大臣官房のほか、学校教育局、社会教育局、科学教育局、体育局、教科書局の五局に再編成された。社会教育局には社会教育課、文化課、調査課、宗務課の四課がおかれたが、十一月

十日には公民教育課が、十二月三十一日には芸術課が新設され、六課編制となった。（ちなみに青少年教育課は学校教育局に入れられ、大学教育、専門教育、師範教育、中学教育、青少年教育の五課で学校教育局が組織されたのである。）

関口泰は戦前戦後を通じて、終始一貫、民主主義、自由主義の立場から国民大衆の擁護と啓蒙のために戦い、護権運動や普選運動に共鳴し、憲法や選挙法をわかりやすく国民大衆のために説き、労働問題や公民教育等を始めとして、ひろく社会文化教育の問題に深い関心と理解を示した。戦後の社会教育行政の執行者に彼が選ばれたことはきわめて当を得たことであつたし、また新しい社会教育行政の発展のために幸せでもあつた。

彼はかねて民衆の生活と職業に即しての公民教育の重要性を一貫して主張してきたが、局長となるや新たに局内に公民教育課を設置し、公民教育の普及徹底につとめ、二十一年春の総選挙をひかえて、公民啓発運動を大々的に展開した。当時の公民教育課長寺中作雄の公民館構想も公民教育の一環としてこのころからようやく胎動し始めたのである。

彼はまた二十年末芸術課を創設し、芸術の奨励および調査、文学、音楽、美術、映画、演劇、映画教育、帝国芸術院等に関する事務を所掌せしめ、芸術課長として今日出海を迎えた。後に、今が二十一年秋から芸術祭という国の主権による始めての芸術祭典を

戦後の窮乏と混乱のさなかに開催して、荒廢した人心をうるおしたことは広く知られていることである。もちろんそのとき関口はすでにその職を去っていたのであるが。

彼の社会教育行政に果たした役割は、社会教育における公民教育行政を正常化し、これを軌道に乗せ発展させて、やがて新しい社会教育施設公民館誕生へのいとぐちを開いたこと、芸術文化行政を文部行政のなかに確立したことであらう。

## 八 おわりに

本稿はもと「社会教育行政を育てた人びと」を単に列伝ふうに記述するのではなく、わが国の社会教育行政の流れのなかで、これらの「人びと」の果たした時代的な役割を明らかにし、その歴史的な位置づけを試みようとするものであった。したがってこのような観点に立つ限り、上述の「人びと」のほかに、なおいくたりかの重要な「社会教育行政を育てた人びと」にふれなければ一貫した論述はできないし、これを逸しては画龍点睛を欠くそしりを免かれまいと思う。

たとえば、すでに普通学務局長のとき青年訓練所の制度を創設して青少年教育に新しい支柱を打ち建て、つづいて下村寿一の後を受けて昭和四年十月から同九年四月まで五年余にわたって社会教育局長の職にあり、戦前の社会教育行政を実質的に体系づけ、



## 二月号 ◆ 予告

これを確立した関屋龍吉氏、社会教育局長にあることわずか一年足らずではあったが、その間に実業補習学校と青年訓練所を統合して新たに青年学校制度を創始するという大事業をなした河原春作氏、青年学校義務制実施を推進した、当時の社会教育局長田中重之氏、青年教育課長として彼を輔け、戦後は新しい理念に基づく社会教育行政の軌道を敷いた柴沼直氏等の名を忘れることはできない。また普通学務局第四課創立の前後から終始文部省にあって社会教育行政に関与し、いわゆる「縁の下力もち」的なかくれた存在として局課長をたすけた中田俊造氏や野尻丈七氏等の名を逸することも妥当とはいえない。戦後は上述の関口泰氏のほかに、局長として、あるいは課長その他として、社会教育行政の発展に寄与した多くの人びとがある。これらの人びとについても当然本稿はふれるべきであったが、現存の「人びと」についてはまたの機会にゆずるようにとの編集者の希望もあったので、すでにその用意もあったが、今回は残念ながら割愛することにした。いずれ将来の機会にまらいたいと思う。

(完)

(大阪大学教授)

高等専門学校創設の趣旨と現状

清水審議官

高等専門学校の教育課程とその特色

山崎貫三

〔アンケート〕

高等専門学校卒業生に対する産業界の期待

〔高専卒業者を多く採用する企業六十社にアンケート〕

〔座談会〕

〔高等専門学校の今後の課題〕

出席者 木戸義一・児玉寛一・下田功・吉識雅夫

・松浦泰次郎(司会) 西田亀久夫

〔ルボ〕

〔沼津高等専門学校の紹介〕

野村正二郎

教育課程研究発表大会の概要

初中局

昭和四十一年度文教行政の回顧

編集部

〔所轄機関紹介④〕

国立遺伝学研究所

森永徳弘

〔教育用語〕「体格と体力」とは

梅本二郎

〔連載第一回〕

人物を中心とした幼稚園教育史

村山貞雄

編集後記

★一九六七年新春号は「未来の教育」を特集としました。特集については、将来の国民生活と教育、経済発展と教育、今後の教育に期待するもの、の三点から未来の教育について考えてみました。「将来の国民生活と教育」では、昨年末の国民生活審議会の答申を中心として、経済企画庁の矢野智雄参事官に執筆をお願いしました。

成長力を持っており、それが国民の生活向上に結びつくかどうかは経済的余力をどのように使うにかかっている、と指摘して、「望ましい国民生活の構図」を打ち出しています。

とくに教育に関しては、教育の普及率が高いが、問題は教育の内容にあるとし、主体性と創造力と社会性のある人間を形成するため人間能力の開発を目標とした教育が望ましいとしています。

★「経済発展と教育」については同じく企画庁の矢野参事官に論じていただき、「今後の教育に期待するもの」では、坂西志保、諸井三郎両氏の執筆のほかにとくに経済界から、松下幸之助、藤井丙午の両氏に示唆の多いご意見をいただきました。

ME J 9483

文部時報 一月号  
第一〇七四号

昭和四十二年 一月 五日 印刷  
昭和四十二年 一月 十日 発行

著作権  
所有 文 部 省

発行者 株式会社 帝国地方行政学会

小川平二

東京都立川市曙町三の五五

印刷所 株式会社 行政学会印刷所

東京都新宿区西五軒町五二

営業所 株式会社 帝国地方行政学会 館別

電話 (268) 二二四一代

振替口座 東京一〇、〇〇〇番

購 読 料		
定価	一冊	七十円
送料	〃	六円
一か年		八百四十円
(前納の場合は送料不要)		
ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申しあげます。なお購読の申し込みは、直接発行所またはよりの書店にお願いします。		